



口絵1 李宓「万松山房縮本蘭亭序」翁方綱跋本 第一開  
本紙各 4.5 × 3.0 cm (黒川古文化研究所、原寸、1606 年刻)



口絵2 第二開 (同)

0 S=1/1 5cm



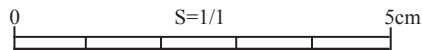
口絵3 第三開 本紙 6.5 × 8.5 cm (同、1782年)

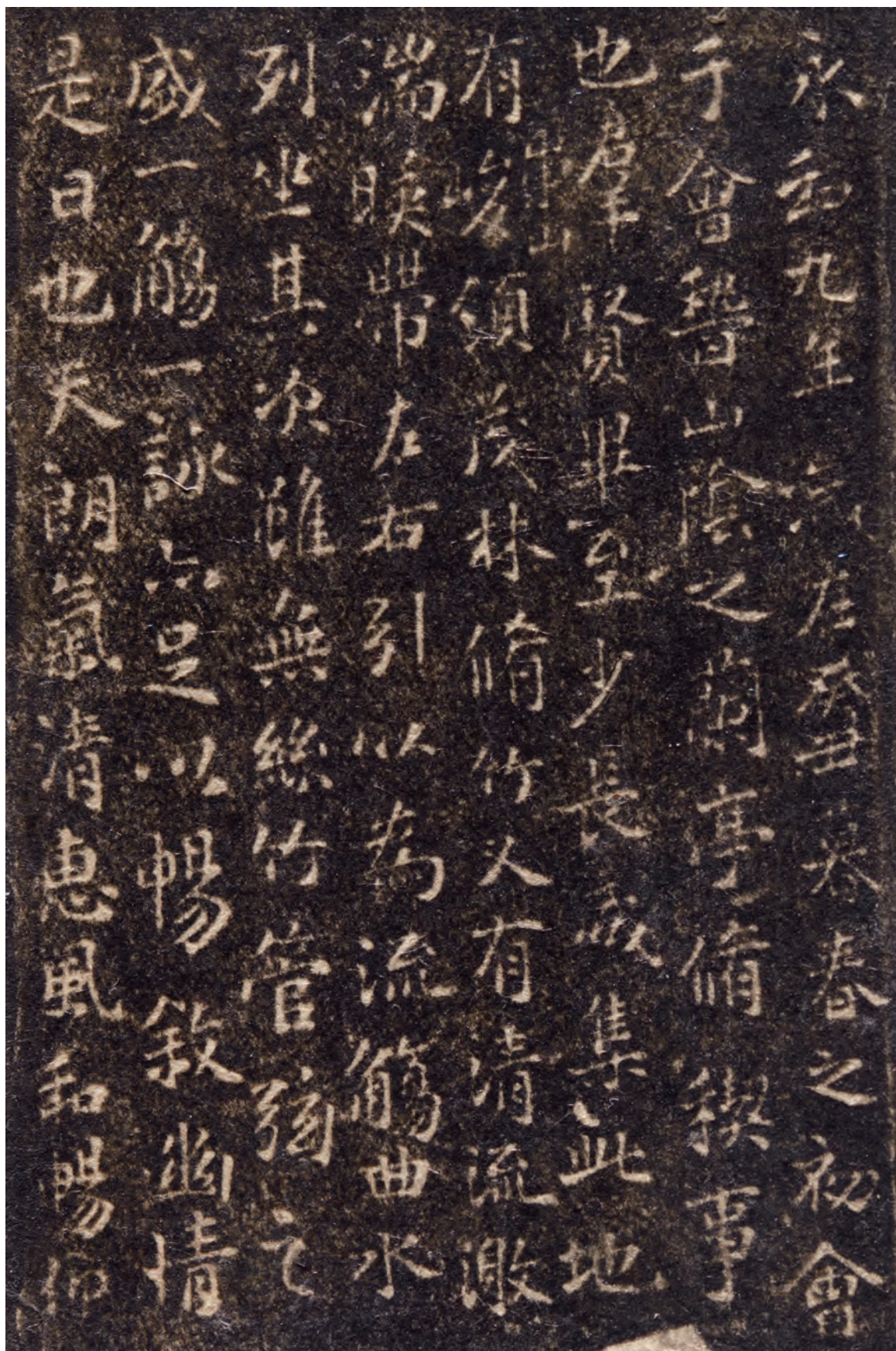


口絵5 箱 8.6 × 5.6 cm (同、1901年刻)

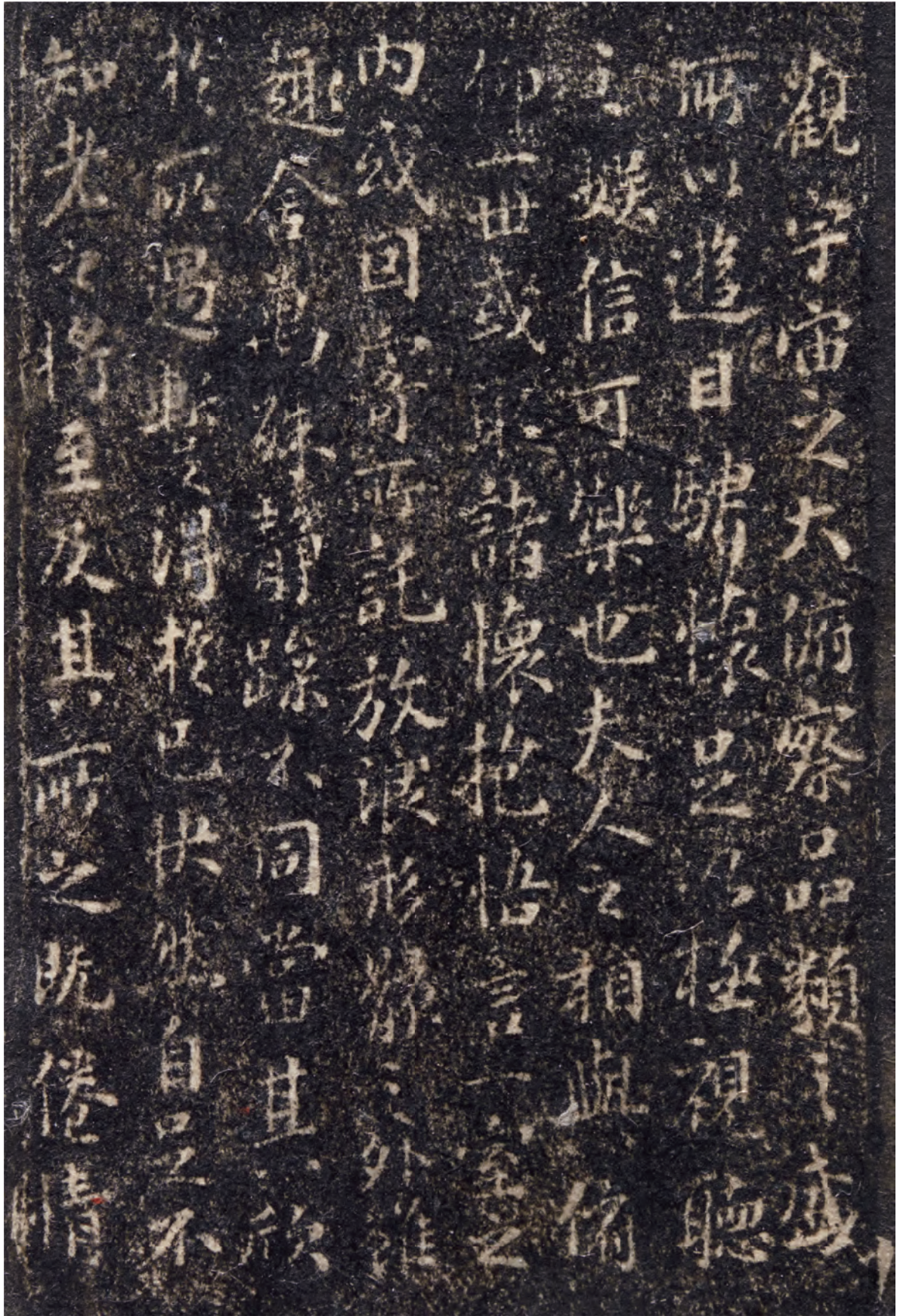


口絵4 表紙 7.8 × 4.8 cm (同、1782年)

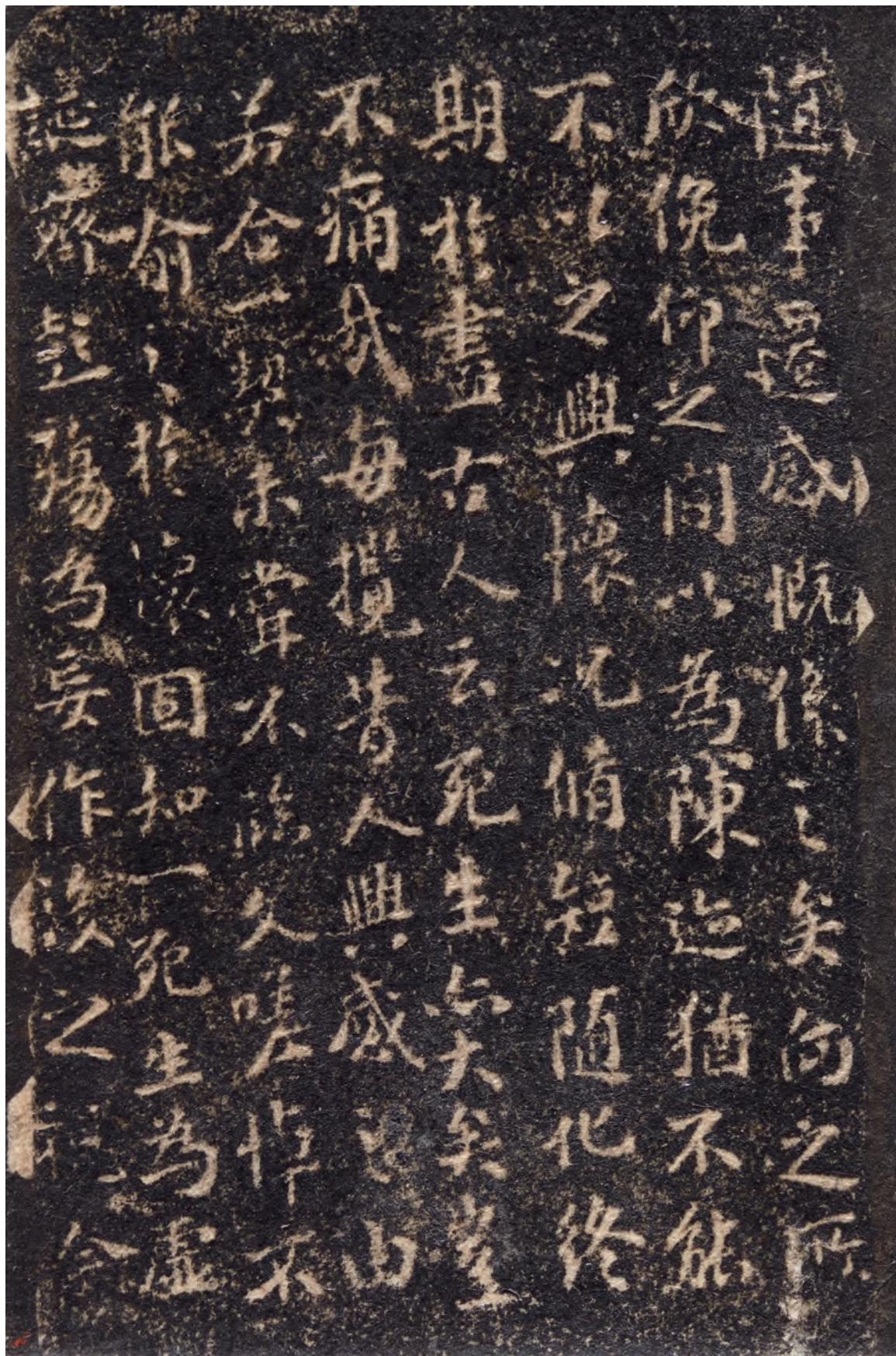




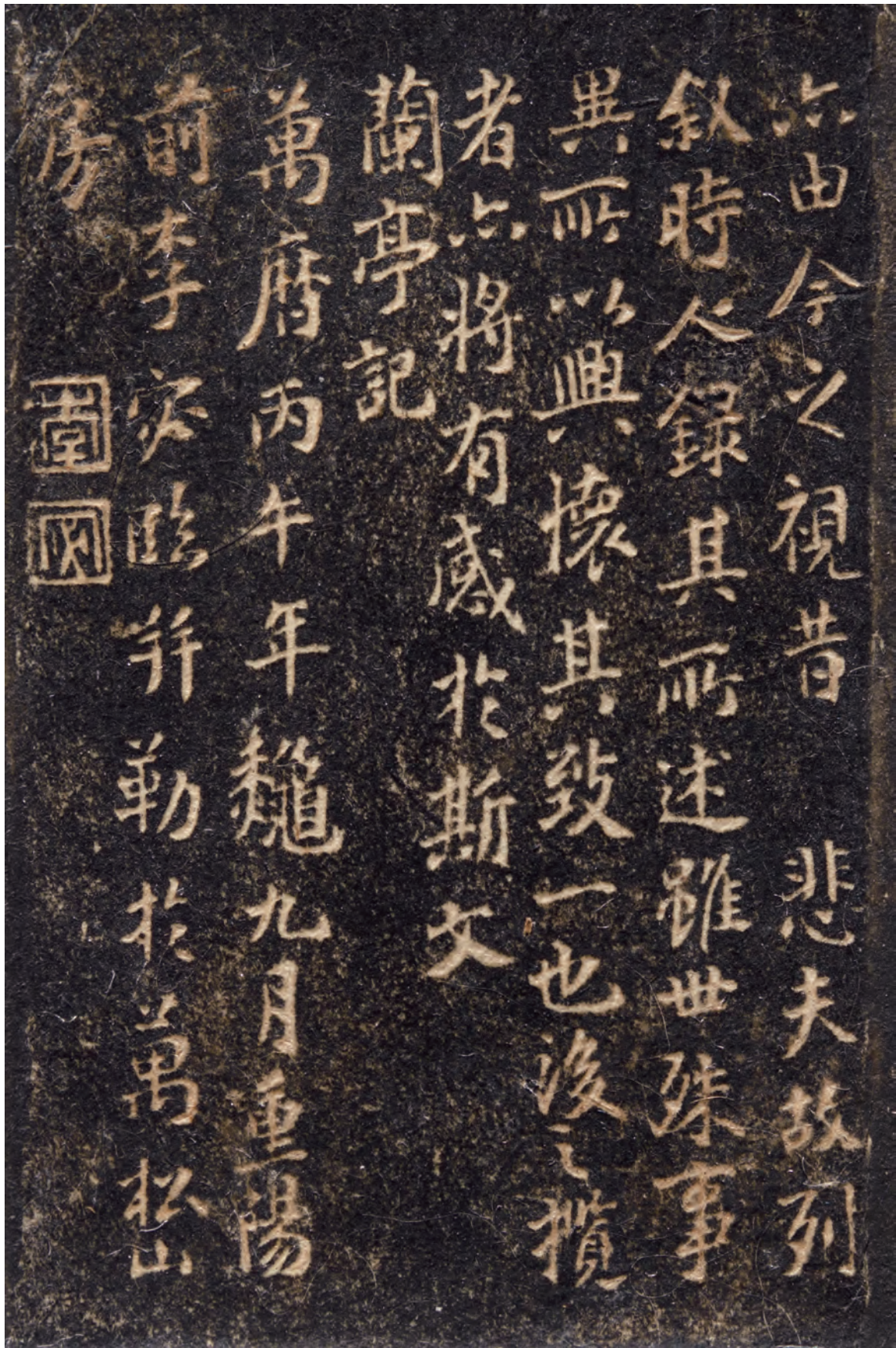
口絵6 拓本 第一頁 約5倍大



口絵7 拓本 第二頁 約5倍大



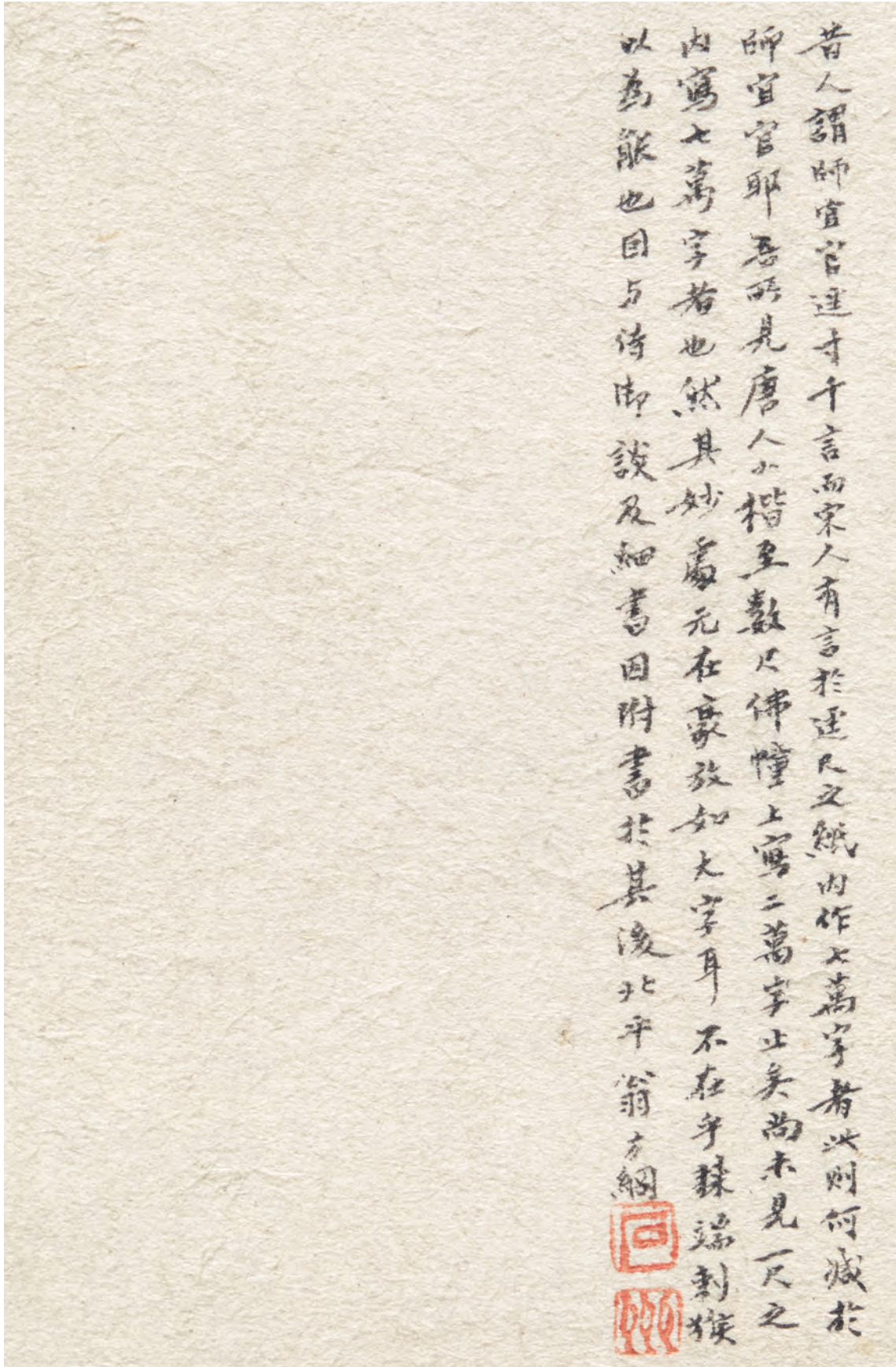
口絵8 拓本 第三頁 約5倍大



口絵9 拓本 第四頁 約5倍大

右萬松山房縮本蘭亭明李宓字義民福建  
龍溪人以青田寸石四面環刻其石嘗為金壇  
王忠舟所得慮舟跋之謂以褚本縮成不失  
豪髮後為揚州汪中也杰重摹勒石此其初  
本合不可多得矣然其中尚不免行次位置  
之移失偏倚點畫之舛訛未知慮舟何以云  
豪髮不失也予以油素影摹計凡改三四十  
餘處而後成之它日僅遇良工亦以青田小石  
鐫之庶幾可髣髴師宜官運寸之意乎  
乾隆壬寅孟冬廿二日北平翁方綱識

口絵 10 翁方綱 第一跋 約5倍大



口絵 11 翁方綱 第二跋 約 4.5 倍大



# 「館藏品研究」李宓 「万松山房縮本蘭亭序」と翁方綱の跋について

飛田 優樹

## はじめに

筆者は二〇二二年に黒川古文化研究所の연구원となり、まず所蔵中国書画の悉皆調査を行った。その過程で、収蔵庫の棚に眠る李宓「万松山房縮本蘭亭序」翁方綱跋本（口絵1〜5）を見出した。本作は当研究所や和泉市久保惣記念美術館「微の美術」展<sup>1</sup>での展示歴があるが、学界・書道界で認知が進んでいるとは言い難い。しかし、小さいながらも筆法を正確に刻した蘭亭序の拓本、それと競うように更なる極小字で書かれた翁方綱（一七三三〜一八一八）の跋は、ともに肉眼では細かな筆致の一つ一つを確認できないほど緻密である。さらに、深井純氏が二〇一四年に撮影していた高精細画像（口絵6〜11）を見て目を疑った。特に翁方綱第二跋は一字一ミリメートルほど、名のある書家の作品としては最小クラスだが、原寸の一〇〇倍に拡大しても一切破綻がなく、線につけられた肥瘦の変化は合理的で、現在知られる小字作品の中でも格別に優れている。そして、関連する作品や文献の調査を進めるうち、本作は明清の縮本蘭亭という研究領域においてこれまで不足していた情報を補うことのできる重要資料であることがわかってきた。

長きにわたり敬仰された王羲之（三〇三〜三六一）の書は、その膨大な需要に応え、あらゆる手段で複製されてきた。その最高傑作といわ

れる蘭亭序もまた、原跡が唐太宗（五九八〜六四九）の陵墓に副葬されて以降は初唐に作られた数本の模本・石刻を頂点とし、大量の重模本が作られた。古来その二大系統と認知されてきたのが、褚遂良（五九六〜六五八）模とされる「褚摹本」系（前近代には墨蹟本のほとんどが褚摹系に分類されていた）と、欧陽詢（五五七〜六四一）の臨書にもとづく刻石とされる「定武本」系である。民間に流通するこれらの拓本を相互比較し、筆画・字体の微細な相違によって新旧優劣を論ずる学問は、宋代以降の士大夫にとって格好の研究領域となっていく<sup>2</sup>。

蘭亭諸本の派生形態に、原跡よりも寸法を小さくした「縮本」がある。その淵源は古来二説があり、一つは唐太宗が欧陽詢や褚遂良に命じて作らせたとする説、いま一つは南宋・賈似道（一二一三〜七五）が愛用の玉枕に定武本を縮刻させたという説である<sup>3</sup>。いずれにせよ、現存最古とされる拓本は南宋の式古堂本「玉枕蘭亭序」（上海図書館、図1）である。さらに、元以降の文人が書いた肉筆の縮本も多く伝わっている。清代後期の大収蔵家・呉雲（一八一〜八三）は多種多様な蘭亭を蒐集して「二百蘭亭齋」と称したが、その中でも「縮本」は三十点以上を占める一大ジャンルとなっている<sup>4</sup>。

清代の縮本蘭亭の中で特に注目され、『書道全集』<sup>5</sup>にも採用されたことがあるのが、翁方綱による縮本（以下、「翁縮本」と呼称。図2）である。翁方綱は順天大興（北京）の人で、乾隆十七年（一七五二）の進士、

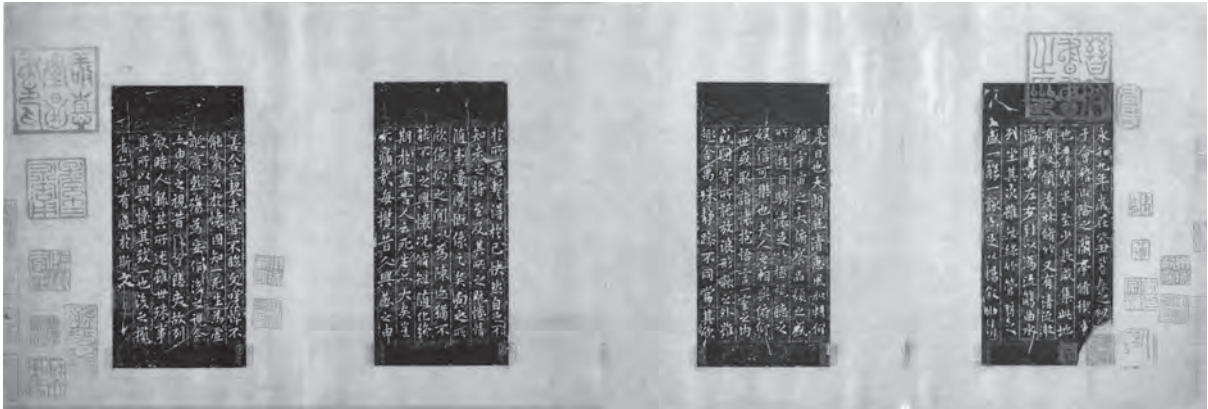


图1 「玉枕蘭亭序·式古堂本」  
(南宋、上海圖書館)

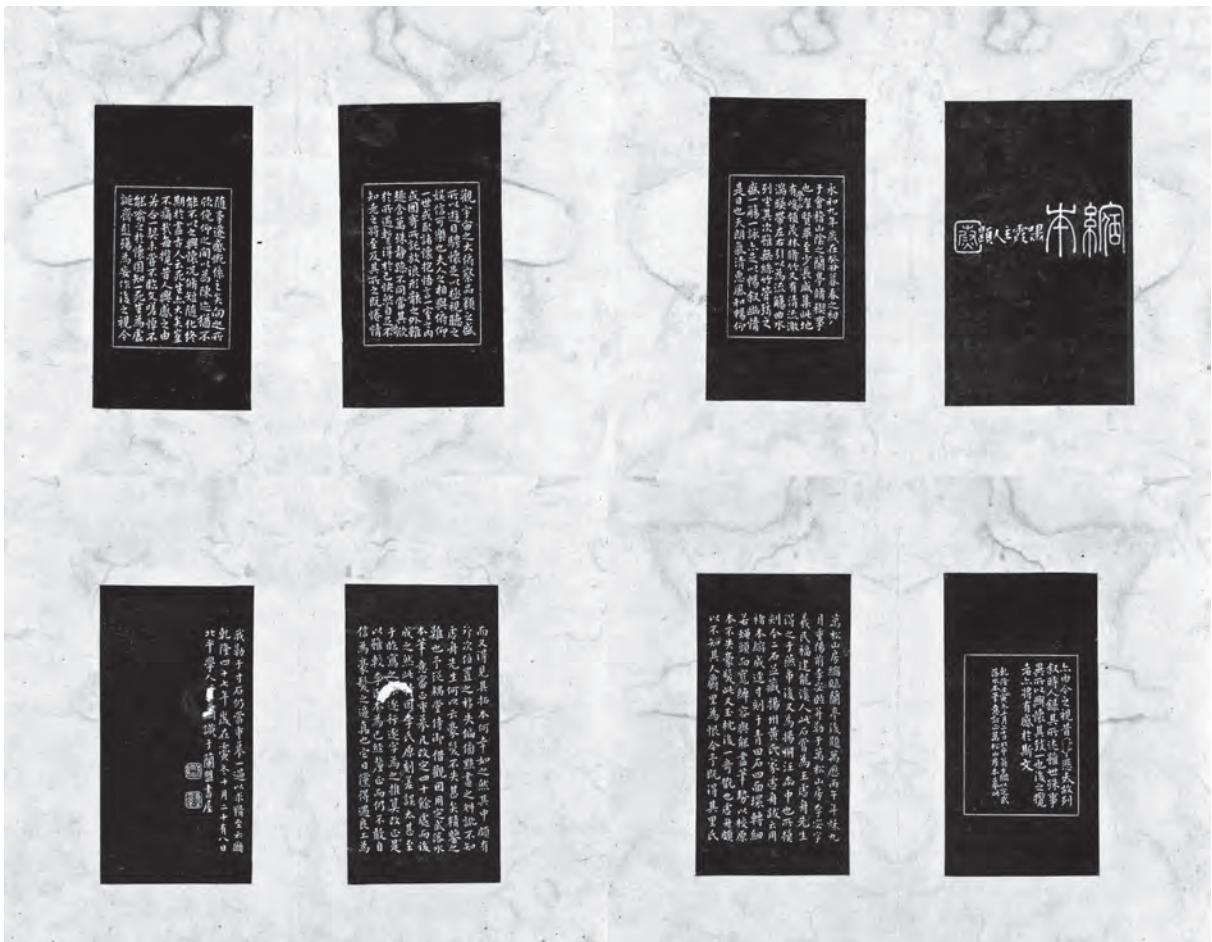


图2 「翁方綱縮本蘭亭序」  
(1853年刻、東京国立博物館)

媒信可樂也夫人之相與俯仰一世或取諸懷抱悟言一室之內或同寄一託放浪形骸之外雖趣舍萬殊靜躁不同當其欣於所遇暫得於己快然自足不知老之將至及其所之既倦情隨事遷感慨係之矣向之所欣俛仰之間以為陳迹猶不能不以之興懷况脩短隨化終期於盡古人云死生亦大矣豈

永和九年歲在癸丑暮春之初會於會稽山陰之蘭亭脩禊事也群賢畢至少長咸集此地有峻嶺茂林脩竹又有清流激湍映帶左右引以為流觴曲水列坐其次雖無絲竹管絃之盛一觴一詠亦足以暢敘幽情是日也天朗氣清惠風和暢仰觀宇宙之大俯察品類之盛所以遊目騁懷足以極視聽

蘭亭石刻有一百一十七種宋理宗內府覆為十冊今散落人間其元明所刻又不知凡幾也定武向為甲觀元時已艱致讀趙孟頫跋可見宋趙

不痛哉每覽昔人興感之由若合一契未嘗不臨文嗟悼不能喻之於懷固知一死生為虛誕齊彭殤為妄作後之視今亦由今之視昔悲夫故列叙時人錄其所述雖世殊事異所以興懷其致一也後之攢者上將有感於斯文

觀小字然則放大收小唐宋有之不止于宓也若孫過庭吳詵為草書則別出一枝不向如來行處行矣  
 乾隆癸亥十一月望  
 臣張照敬跋

孟堅落水本至今猶存海內第一也此本為明人李宓所造蓋縮定武為蠅頭無豪釐不肖似技埒棘猴哉彼一百一十七種內已有柳公權大字秦

圖3 「明拓縮本蘭亭序」(明、北京故宮博物院)

官は内閣学士に至った。「乾嘉の学」を代表する碩学であり、碑帖拓本の考証に優れ、蘭亭序についても『蘇米齋蘭亭考』の専著がある。乾隆四十七年（一七八二）、彼は「翁縮本」の制作にあたり、明末の李宓が刻した「万松山房本」を底本としたが、その際、「万松山房本」に字面の誤りが多いのを遺憾とし、その四十か所以上の過誤を修正したという。しかし、「万松山房本」の実物の情報は現在ほぼ出回っておらず、現存は確認できないとの記述も散見される。それゆえ「万松山房本」についての情報源はほぼこの翁方綱の批判的言及に限られており、「明末の間違いだらけの縮本」として認知されてきたのである。

本稿で取り上げる「万松山房縮本蘭亭序」の拓本（以下、黒川本）は、款記や翁方綱による跋文の内容から、まさにこの時に翁方綱が見た「万松山房本」そのものであり、「翁縮本」の祖本にあたると思われる。

黒川本と対照すると、実はもう一点、すでに知られた作品のなかに「万松山房本」の拓本を見出すことができる。それは北京の故宫博物院に「明拓縮本蘭亭序」の名で收藏される小帖（以下、北京本。図3）である。北京本は乾隆帝（一七一〇〜九九）の御璽や張照（一六九一〜一七四五）の跋を伴い、『石渠宝笈三編』にも著録されるが、李宓の款記・署名等が失われている。ただし、張照の跋中には「此の本は明人李宓の造る所為り」とある。しかし、先日発表された縮本蘭亭の歴史を扱う趙明氏の論考では、「万松山房本」の名は翁方綱の文章を根拠に明代までに多く作られた拙劣な翻刻本として紹介され、その一方で、北京本については張照の跋を引用し、「方寸の間に蘭亭序を再現し、毫厘も違わない」と称賛している。しかしその無款の北京本こそ、実際には翁方綱が文献上で批判する「万松山房本」の実物そのものであったわけである。

一方、黒川本は蘭亭序縮模の後に「蘭亭記」三字、「万曆丙午年秋九

月重陽前、李宓臨並勒於万松山房」の款記三行、および連印形の「李宓」の署名が続く。これらは北京本では欠けている部分だが、翁方綱の『復初齋文集』手稿本に記録される「万松山房本」の特徴「李宓名款前に蘭亭記三字有りて一行を作し、後に李宓二字連珠小印有り」と符合している。また、黒川本と北京本に共通する蘭亭序縮模の部分は概ね一致し、別石というほどの相違は見られない。ただし、黒川本は石の四面の拓本をそのまま四頁に貼った整本であり、六頁に剪装された北京本よりも原状を反映している。さらに、全体に黒川本の方が線は痩せて石の傷も少なく、より旧拓と思われる。

これまで「翁縮本」の解説等では、翁方綱の口吻を信じ、「明末の崩れきった縮本蘭亭を翁方綱が修正した」というストーリーが語られてきた。しかし、「万松山房本」の悪評は翁方綱が自作の正統性を高めるために主張したものであり、これのみに基づく評価は客観性を欠いている。翁方綱の主張にどの程度の妥当性があるのかは、本来、実物を参照しなければ正しく検証することができない。後に論ずるように、確かに「万松山房本」は蘭亭序の複製としては字画の変更が多いが、前例のない極小サイズへの挑戦や筆意表現の追究といった側面から再評価すべき点も多い。実際、李宓の書は同時代の董其昌（一五五五〜一六三六）から称賛されたといわれ、翁方綱の批判以前、「万松山房本」は王澐（一六六八〜一七四三）・張照・黄易（一七四四〜一八〇二）らによって珍重されていた。彼らと翁方綱の評価の差異には、単なる正誤として断ずることのできない書字観の大きな断層が背景として存在している。また、黒川本の第二跋は他書に見られない小字論であり、この跋自体も書法作品として非常にレベルが高く、翁方綱の小字の実力を遺憾なく発揮した優品として、「蠅頭書」とも呼ばれる小字書法の歴史上で注目すべ

き資料である。従来この種の小字作品の研究はあまり盛んでなく、蠅頭書と一口に言っても実物の尺寸は字幅一〜四ミリ程度と様々であり、法量など詳細な情報を伴う資料紹介が急務となつてゐる。<sup>13)</sup> 本作はこの点からも一石を投じる資料と言えよう。

本稿では李宓「万松山房縮本蘭亭序」翁方綱跋本（黒川本）を紹介するとともに、文献と実物を互いに参照し、李宓と翁方綱の双方の視点から考察を加える。まず黒川本の基礎情報を提示し、次に李宓と翁方綱の縮本蘭亭をめぐる事実関係を時系列に整理する。特に「万松山房本」側に視点を置いた研究は従来になく、事実関係の整理に伴つて多くの知見を得た。その後、実際に黒川本を参照しながら、翁方綱の「万松山房本」批判の妥当性を検証し、両者の模写態度の相違や翁方綱の小字作品の評価について考察する。

## 一 黒川本の基礎情報

まず黒川本の基礎情報を紹介する。本作の場合、寸法が極めて重要であるため、その点に注意しつつ記述する。

黒川本・李宓「万松山房縮本蘭亭序」は、縦七・八×横四・八センチメートルの小冊子に表具されており、板表紙の中央に翁方綱による題箋が貼られている（口絵4）。題箋の寸法は五・八×一・二センチで、そこに字幅約三ミリで「万松山房縮本蘭亭」の題字、その下に字幅約一〜二ミリで「乾隆四十七年冬十月二十二日、北平翁方綱為耦堂侍御題」の四行が記される。

冊を開くとまず四頁にわたつて「万松山房本」の拓本が貼られている（口絵1〜2、6〜9）。拓本の寸法は各頁四・五×三・〇センチで、こ

れは「翁縮本」（図2）各頁の外枠野線と一致する。毎頁に八行を収め、字幅は約三ミリである。この字粒は「玉枕本」などそれまでの縮本蘭亭と比べてもはるかに小さい。北京本と異なり、切り貼りした形跡はなく、各頁が刻石の四側面に対応している。蘭亭序の全文に続けて、末尾に「蘭亭記」の三字、「万曆丙午年秋九月重陽前、李宓臨並勒於万松山房」の款記三行、連印形の「李宓」の署名がある。

その後に翁方綱の跋が二頁続く（口絵3、10〜11）。この部分は左右頁をまたぐ一紙に書かれ、本紙寸法は六・五×八・五センチである。第一跋は字幅約二〜三ミリで一六九字、第二跋は字幅約一ミリで一〇六字を書す。いずれも類稀な、目を疑うほどの極小字である。以下に跋の全文を翻刻する。

第一跋…右万松山房縮本蘭亭、明李宓、字義民、福建龍溪人、以青田石四面環刻。其石嘗為金壇王虚舟所得、虚舟跋之謂、以楮本縮成、不失豪髮。後為揚州汪中也盍重摹勒石。此其初本、今不可多得矣。然其中尚不免行次位置之移失、偏傍点画之舛訛、未知虚舟何以云豪髮不失也。予以油素影摹、計凡改正四十餘処、而後成之。它日儻遇良工、亦以青田小石鐫之、庶幾可髣髴師宜官逕寸之意乎。乾隆壬寅孟冬廿二日、北平翁方綱識。

第二跋…昔人謂師宜官逕寸千言、而宋人有言於逕尺之紙內作七万字者、此則何減於師宜官耶。吾所見唐人小楷、至数尺仏幢上写二万字止矣。尚未見一尺之內写七万字者也。然其妙処、元在豪放如大字耳。不在乎棘端刺猴以為能也。因与侍御談及細書、因附書於其後。北平翁方綱。「石州」（朱文連印）

また、本作には八・六×五・六センチの箱が付属している（口絵5）。中央に字幅約一・五センチの隸書で「韞匱而蔵<sup>14</sup>」、左右に字幅約四ミリの行書で「此翁覃溪先生蠅頭小真跋万松山房縮本蘭亭也。前為張藕堂侍御所蔵、今歸彊靜齋主人矣。光緒壬寅十一月既望、俟園署」と刻され、それぞれ黒漆・朱漆で塗り込められている。書者の俟園は曾熙（一八六一～一九三〇）、旧蔵者といわれる「張藕堂侍御」は翁方綱の文献と読み合わせると「施藕堂侍御」の誤りで施学濂を指すと思われる。もう一人の旧蔵者として名が挙がる彊静齋主人は呉式釗（一八五一～？）である。

## 二 李宓と翁方綱の縮本蘭亭をめぐる事実関係

まずは李宓「万松山房本」と翁方綱「翁縮本」をめぐる事実関係を時系列に整理しておく。年表も付したので参照されたい。

### （一）明末漳州の書家、李宓

款記によると、「万松山房本」は万曆三十四年（一六〇六）、李宓が万松山房にて縮臨し、石に刻んだものである。李宓は明末の万曆崇禎年間に活躍した龍溪（福建省漳州）の人で、決して有名な人物ではないが、その伝記と現存作品については李竹深「明代漳州著名書法家李宓事迹稽考<sup>15</sup>」に詳しくまとめられている。李竹深氏は、李宓に関わる文献として光緒四年序『漳州府志』と翁国樑『漳州史蹟』を挙げ、刻石または拓本が現存する作品として「修建嘉濟廟聖跡碑記」等を紹介し、それらの依頼者である郷里の名士、林鈺（？～一六三六）や王志道（一五七四～一六四六）らと詩の唱和や交友関係があったことを指摘している。

その中で最も重要な『漳州府志』の記述<sup>16</sup>は、およそ次のような内容である。李宓は各書体に長け、よく道観の碑額を書いた。董其昌も手紙を送り李宓の書を求めたことがある。晩年、王羲之「黄庭経」に続けて「黄庭内景経」を書いたが、非常に繊細な出来で、その石はのちに郡守が購入した。また、王澐が「玉枕蘭亭」の石を得たが、彼が漳州人であることには調べ至らなかった。ここでの「玉枕蘭亭」は縮本蘭亭の総称であり、本稿で論じる「万松山房本」を指している。

ここには李宓「万松山房本」を考える上で重要な情報が込められている。第一に、特記される彼の作品が「黄庭内景経」と「玉枕蘭亭」であること。双方とも王羲之に関わる作品だが、「黄庭内景経」は王羲之が書いていない部分、「玉枕蘭亭」は実物より小さな縮本である。つまり、いずれも古典そのままの複製や再現でなく、著名な王羲之書跡に因んだ一種のオマージュと考えられる。王羲之「黄庭経」が小楷であることや作風描写から、李宓「黄庭内景経」も「万松山房本」に似た繊細な小字刻石であったと推察される。第二に、李宓は在世時に郷里で石碑の書丹を手がけるほどの書名があり、董其昌にも認められたが、百年後には王澐の博学をもってしても調べつかないほど無名になっていたということである。董其昌側の文献は確認できないが、李竹深氏が言うように、林鈺など郷里の名士に重んじられていたことは確かだろう。

ちなみに、李宓の「万松山房」という室号の由来はこれまで指摘されてこなかったが、これについて考えるヒントが、次節で紹介する黄易「秋盦遺稿」「跋汪雪疆摹禊帖縮本」という文献に載っている。そこには郷人からの伝聞として「李宓、字は義民、閩の龍溪の人、万関の下に家す<sup>17</sup>」と記されている。この「万関」は、明末に施邦曜（一五八五～一六四四）が建てた「万松関」を指すと思われる<sup>18</sup>。建設時に林鈺が著

万松山房本・翁縮本 関連年表

| 年                 | 月日        | 事項                          | 主な出典         |
|-------------------|-----------|-----------------------------|--------------|
| 万曆 34 年 (1606)    | 9 月重陽前    | 李宓、「万松山房本」を書いて石に刻す          | 黒川本・李宓款記     |
| 乾隆 8 年 (1743) 以前  | —         | 王澍、北京にて「万松山房本」刻石を入手         | 王澍『虚舟題跋』     |
| 乾隆 8 年 (1743)     | 11 月 15 日 | 張照、内府所蔵「万松山房本」(北京本)に跋を寄せる   | 北京本・張照跋      |
| —                 | —         | 汪恽、「万松山房本」の翻刻を制作            | 黄易『秋盦遺稿』     |
| —                 | —         | 黄易、陳照圃より李宓の情報を聞く            | 黄易『秋盦遺稿』     |
| 乾隆 47 年 (1782) 以前 | —         | 揚州黄氏、「万松山房本」の原刻・翻刻をともに入手    | 翁方綱手稿        |
| 乾隆 47 年 (1782)    | 10 月 20 日 | 施学濂、「万松山房本」拓本(黒川本)を翁方綱に見せる  | 翁方綱手稿        |
| 同                 | 同         | 翁方綱、「万松山房本」を修正し「翁縮本」を制作     | 翁方綱手稿        |
| 同                 | 同         | 翁方綱、「自跋審正万松山房縮本蘭亭」を著す       | 翁方綱手稿        |
| 同                 | 同         | 翁方綱、施学濂蔵「万松山房本」跋の原稿を書く      | 翁方綱手稿        |
| 同                 | 同         | 翁方綱、施学濂蔵「玉枕本」第二跋の原稿を書く      | 翁方綱手稿        |
| 同                 | 10 月 22 日 | 翁方綱、黒川本に第一跋と題箋を書す           | 黒川本・翁方綱跋     |
| —                 | —         | 翁方綱、黒川本に第二跋を書す              | 黒川本・翁方綱跋     |
| 同                 | 10 月 28 日 | 翁方綱、「翁縮本」自跋を書す              | 翁縮本・自跋       |
| 乾隆 48 年 (1783)    | 9 月 16 日  | 劉墉、「翁縮本」に跋を寄せる              | 翁縮本・劉墉跋      |
| 同                 | 11 月 20 日 | 宋葆淳、「翁縮本」に跋を寄せる             | 翁縮本・宋葆淳跋     |
| 乾隆 60 年 (1795)    | 8 月 22 日  | 翁方綱、「蠅頭書冊」第一段を書す            | 蠅頭書冊         |
| 同                 | 8 月 25 日  | 翁方綱、「蠅頭書冊」第二段を書す            | 蠅頭書冊         |
| 嘉慶 3 年 (1798)     | 9 月 2 日   | 翁方綱、何元錫蔵「万松山房本」に跋を寄せる       | 翁方綱手稿        |
| 嘉慶 20 年 (1815)    | 8 月 15 日  | 劉彬華・呂翔・温遂之・張維屏、「翁縮本」に観款を寄せる | 翁縮本・観款       |
| 嘉慶 21 年 (1816)    | —         | 『石渠宝笈三編』、「万松山房本」を収録         | 『石渠宝笈三編』     |
| 同                 | 閏夏        | 謝青岩、葉夢龍の依頼で「翁縮本」を石に刻す       | 翁縮本(北京故宫博物院) |
| 咸豊 3 年 (1853)     | 9 月重陽後    | 汪蔚、「翁縮本」を石に刻す               | 翁縮本(東京国立博物館) |

した「施公新築万松関記」も伝わっており、後に鄭成功(一六二四〜六二)もここを拠点とした。現在も史跡として残っているようである。また、万松関の建てられた山を万松嶺という。万松関が築かれたのは崇禎二年(一六二九)だが、万松嶺の名はより早く正統弘治(一四三六〜一五〇五)の間に定着している<sup>19)</sup>。このことから万曆三十四年に使用されている李宓の「万松山房」は万松嶺に由来することがわかる。

なお、李竹深氏の紹介する翁国樑『漳州史蹟』「嘉濟廟」<sup>20)</sup>は近代の著述だが、「民間伝説」として興味深い逸話を載せている。それによると、李宓は青年の頃、果物籠の題箋を書く仕事をしていた。当時朝廷には漳州特産のボンカンが進貢されており、多くの者が李宓の題箋が見事なので注目していた。林釭が郷里に帰るとき、漳州「嘉濟廟碑」の清書を董其昌に依頼すると、「あなたの郷里には李宓がいるのに、なぜわざわざ遠くの者に頼むのか」と断られた。これ以降、李宓の書名は大いにながったという。

## (二) 王澍の「万松山房本」入手から李宓の詳細判明まで

さて、李宓の活動からおよそ百年後、偶然にも「万松山房本」の石を入手し、初めて書壇における評価の俎上に載せた人物が王澍である。翁方綱からみて一世代前の碩学にあたる王澍は、翁方綱のように「万松山房本」を否定することなく、全面的な賛辞を与えていた。その著『虚舟題跋』に「万松山房本」への跋が収録されている。

昭陵辯才の蘭亭を得、起居郎褚遂良等に命じて撫せしめ、諸王大臣に賜ふ、是に於て世間伝本遂に衆し。然るに筆法異なりと雖も、

而れども尺幅は殊ならず。宋の賈秋壑に至りて始めて定武五字損本を以て縮して小字と成す、今伝ふる所の玉枕蘭亭は是なり。余癸巳の冬を以て李宓摹する所の小石を燕市に得、楮本を用て縮して径寸と成し、青田石の四面に刻す。字細なること蠅頭の若く、而れども寛綽容与として、能く筆勢を尽くし、以て原本と校ぶるに、豪髪を失はず、此れ又た玉枕の後の一奇翫なり。李宓は神廟の時の人為り、書学精なること能く此くの如し、而れども名は時に顕れず、爵里亦た従りて考見する無し、深く惋惜す可し。然れども幸にして此の石を留め、天下後世をして尚ほ李宓の姓名有るを知らしむるは、亦た之を不幸と謂ふ可からず。余此の石を得て絶だ之を珍愛し、念じて終没するに忍びず、乃ち数十本を精搨し、人間に流布せしむ。李宓知る有らば、当に王生を引きて知己と為すべし。或いは李宓を知る者有るに遇ひ、僕をして其の生平を考え、作りて小伝を為し、此の石と俱に不朽ならしむるを得れば、是れ亦た千古の一快事なり。(王澐『虚舟題跋』卷九)<sup>22)</sup>

王澐は賈似道による「玉枕本」を縮本蘭亭の淵源としつつ、蠅頭のように小さいにもかかわらず「寛綽容与、能尽筆勢」のさまで青田石の四面に刻された「万松山房本」を「玉枕の後の一奇翫」と称賛する。「寛綽容与」はよく似た「寛綽有餘」<sup>23)</sup>が小字の形容によく用いられ、「能尽筆勢」は『中庸』の「能尽其性」<sup>24)</sup>等がもとである。この「寛綽容与、能尽筆勢」とは要するに「広々と余裕をもって書かれ、筆勢を發揮しつくしている」ということだろう。また、「玉枕本」が定武本に基づくのに対し、「万松山房本」は楮摹系に属するという。しかし、王澐は北京で偶然この石を得たものの、李宓という人物に調べ至らず、どこ出身かもわからない

全く無名の人として扱っている。王澐が得ることのできた李宓の情報はただ万曆期の人という一点のみで、これは「万松山房本」の款記を読み取ったにすぎない。また、王澐は「万松山房本」が逸失することを惜しみ、数十本の拓本を流布させたという。この文章が書かれた年代はわからないが、遅くとも王澐の没する乾隆八年（一七四三）以前である。

これと並行し、乾隆八年には内府に収蔵された「万松山房本」の拓本に張照が跋を寄せている。これが現在の北京本である。張照は「万松山房本」を定武系とし、その巧緻さを称えている。しかし、縮本蘭亭一般の歴史を説く跋文の内容からして、彼も李宓が何者であるかを知らないようである。<sup>25)</sup>この拓本は後に『石渠宝笈三編』に収録される。

その後、恐らく乾隆年間半ば以降に、揚州の人で金石学に通じた汪衮により「万松山房本」の翻刻本がつくられた。さらに少し後、清朝芸苑の中心人物たちはようやく李宓が何者なのかを知ることとなる。それらの事情は黄易『秋盦遺稿』「跋汪雪疆摹禊帖縮本」に詳しい。

賈秋壑の玉枕定武已に奇なれども、李宓の縮する所は尤も更に小さく更に奇なり。雪疆兄両つながら之を摹し、毫髪を差せず、誰か云はん、今人は古に及ばずと。王虚舟吏部初めて李宓の刻石を燕市に得るも、其の人を知らず。吾が友陳照圃閩より来りて云はく、「李宓、字は義民、閩の龍溪の人、万関の下に家す。明の万曆の間、書を以て名あり、梵宇琳宮は多く其の遺跡にして、董文敏其の書を慕ひ、毎に幣を具して之を求むるの事邑乗に具はる」と。陳君曾て小楷黄庭内景経の手づから龍池片石に刻せる者を見るに、極めて精妙なり、海豊張外郎穆庵に之を購得せられ家に蔵さる、其の説信ず可し。王吏部云はく、「余李宓の刻石を得、絶だ之を珍愛し、終没



するに忍びず、数十本を精拓し、人間に流布せしむ。李宓知る有らば、当に王生を引きて知己と為さん」と。今雪疆兄の妙手精心、名蹟の伝を広め、亦た古人の知己たり。惟だ余の生ずるや晩く、未だ吏部に見えて陳君の言を以て相ひ告げて一に快然と称するを為す能はざるも、雪疆兄之を知る有り、亦た良に慰まん。玉枕は是れ廖瑩中の手づから縮するを経、廖と李と皆な閩人たり。異苔岑を同じくし、後先媲美す、何ぞ閩人の多藝ならんや。(黄易『秋盦遺稿』<sup>26</sup>)

ここでは李宓の縮本が玉枕本よりも「更に小さく更に奇」であること、汪恂(雪疆)がそっくりの複製を作ったことが記されている。続けて、陳照圃なる人物の言として李宓の詳細が語られる。その内容は概ね『漳州府志』と重なるが、こちらの方がやや詳しく、すでに見た「万関の下に家す」などの記述がある。黄易は李宓のことを王澍に伝えられなかつたのを惜しみつつ、汪恂がこれを知ったのはせめてもの慰みだということ。この文献から、王澍の博学をもつても調べつかなかつた無名の書家、李宓について乾隆後期の文人たちが知り得た経緯が明らかとなる。

### (三) 乾隆四十七年十月の翁方綱と施学濂

乾隆四十七年(一七八二)十月二十日、ついに最も重要な評者、翁方綱が「万松山房本」と対面を果たす。このとき李宓の原刻と汪恂の翻刻、両石はともに揚州の黄氏なる者の手にあつた。翁方綱に「万松山房本」の拓本を見せたのは、杭州の施学濂という人物である。施学濂はもう一つ、南宋の「玉枕本」拓本も所持しており、すでに翁方綱に跋を乞

うていた。同日、翁方綱は「万松山房本」を底本とし、その誤りを修正しつつ自ら「翁縮本」を制作した。黒川本は題箋に「為耦堂侍御題」、第二跋に「与侍御談及細書於其後」とあり、「耦堂侍御」とは施学濂を指している。<sup>27</sup> 題箋と第一跋の日付はいずれも同年十月二十二日、初めて「万松山房本」を見た二日後である。以上から、黒川本はまさにこの日、施学濂が翁方綱に見せ、「翁縮本」の底本となつた拓本そのものである可能性が高い。

この時の翁方綱の活動については、翁方綱『復初齋文集』手稿本<sup>28</sup>に載る同年十月二十日の原稿三篇(図4)、すなわち、「自跋審正万松山房縮本蘭亭」、「跋施耦堂所藏万松山房縮本蘭亭」、「又書耦堂玉枕本後」に最も詳しい記録が残されている。「自跋審正万松山房縮本蘭亭」は「万松山房本」の欠点を具体的に指摘しつつ、自らの制作した縮本について述べたもので、のちに定稿『復初齋文集』巻二十七に「審正万松山房縮臨本」として収録されたほか、後半部はそのまま「翁縮本」自跋<sup>29</sup>の原稿として用いられている。「跋施耦堂所藏万松山房縮本蘭亭」は施学濂蔵「万松山房本」跋の原稿、つまり黒川本第一跋の原稿にあたりと考えられる。「又書耦堂玉枕本後」は同じ施学濂蔵「玉枕本」への跋の原稿である。以下、三篇の翻刻を示す。

#### 自跋審正万松山房縮本蘭亭

万松山房縮臨蘭亭、後題万曆丙午年秋九月重陽前李宓臨并勒於万松山房。此本行次位置大誤者凡二处。第十行末錯移下一字、第十八行末錯移上一字也。至其筆画之失、則稽字下半誤移正中、觴字誤易為易二処、叙字多一ノ、駢字馬下三点誤為一画、躁字祭下半全失、不同不字上画誤連、当字右直誤斷、己字訛已、快字訛快、不知不字上

画誤連、老字上半折処誤断、所之之字末筆全失、既字左半全失、倦字訛イ、遷字中誤加横、尽字中間誤多一横、死字左誤已二処、亦字訛作三点、昔人昔字下日訛作草書、之由之字訛作草書、後二之字亦然、嘗字末筆誤出太長、未嘗不字全失、不能喻之不字誤連、喻字失一横、虚字下半全失、視昔視字ネ（筆者注…草書）誤為ネ（筆者注…楷書）、故列故字末筆、列字末筆皆失、致字、攬字、将字皆全失。以上就其顯然失誤者、已有卅五処之多、至其細微曲折不能肖者、則字字有之。此内止死生亦大矣亦字、惟褚本或有作三点者、其餘則歐褚并無岐法。此本之失、不歸以褚本誘也。李宓、字義民、福建龍溪人。其石曾為王虚舟先生得於燕市、後又為揚州人汪恂中也重摹刻石、今皆藏揚州黃氏家。虚舟跋云、用褚本縮成逕寸、刻於青田石四面、細若蠅頭、而寬綽容与、能尽筆勢、以較原本、不失毫髮。此又玉枕後一奇玩也。虚舟頗以不知其人爵里為惜、今予既得其爵里、而又見其拓本、何幸如之。丙午是明神宗三十四年、李宓名款前有蘭亭記三字作一行、後有李宓二字連殊小印、是揭雖不知是李刻汪刻、然其中顯然之失、至於行次之誤移、偏旁之失錯、而虚舟以為較原本不失毫髮、則虚舟所謂以宋牋精摹趙子固落水本不失毫髮者、亦概可知矣。信乎精鑑之難也。予從耦堂侍御假觀、因用定武落水本筆意審正重摹、并識其概於後。然此特因李氏原刻、行次参互、勉為推算改正、是以雖較李氏本既加審正、而仍不敢自信為毫髮無差也。它日儻得遇良工、為我勒於寸石、仍當重摹一過、以求精刻云爾。乾隆壬寅冬十月廿日。

跋施耦堂所藏万松山房縮本蘭亭

右万松山房縮本蘭亭。明神宗三十四年、龍溪李宓義民摹於青田石四面環刻。其石嘗為金壇王虚舟先生得於京師、虚舟跋之謂、以褚本縮

成、不失毫髮。後為揚州汪中也恂重摹刻石。然褚本与欧臨定武本、神理雖別、而結構并同。今此石本、尚未免有行次之移錯、筆画之疎失、雖神氣近是、而結構皆非矣。未知虚舟何以言毫髮之不失也。予以油漆影摹、凡改正四十餘字、而後成。它日儻遇良工、亦以青田小石精鑄之、庶幾可備鑑家論次爾。乾隆壬寅冬十月廿日。

又書耦堂玉枕本後

壬寅十月廿日、耦堂侍御復以所藏万松山房蠅頭縮本属為審定。即王虚舟所謂、以原本相校、不失毫髮者也。然其筆法行次皆有疎失、不及此本遠矣。万松山房本勒於明神宗時、雖蠅頭太小、与摹本不同、然其失処至三四十字之多、亦足見細書摹写照顧之難、而是本為宋時原刻無疑者矣。

まず、「自跋審正万松山房縮本蘭亭」は、「万松山房本」を蘭亭序の原作と比較し、二箇所の行のズレと三十五箇所の筆画の誤りを列挙している。これら具体的指摘については、次章にて実物と比較して詳しく確認する。続けて、李宓が福建龍溪の人であり、かつて王澐がその石を手に入れ、汪恂が翻刻を作り、今は両石とも揚州黄氏の所有であると述べる。さらに、王澐『虚舟題跋』の評価、「用褚本縮成逕寸、刻於青田石四面、細若蠅頭、而寬綽容与、能尽筆勢、以較原本、不失毫髮。此又玉枕後一奇玩也」を引用しつつ、王澐が「原本と比べて少しも違わない」と褒めるのは言い過ぎで、実際には多くの誤りがあると指摘している。そして、施学濂からこの拓本を借り、「定武落水本」の筆意によって修正しつつ自らも模本を作ったという。款記等の形式を描写した傍線部は『復初齋文集』定稿や「翁縮本」自跋では削られているが、本文の「は



じめに」でも言及したように、ここに記された情報は黒川本の款記の体裁と一致している。また、その直後の波線部も定稿や自跋に見られない記述だが、「この拓本が李宐原刻・汪恠翻刻のどちらであるかはわからない」という重要な証言である。

次に、「跋施耦堂所蔵万松山房縮本蘭亭」では、まず「万松山房本」の概要を手短に述べ、王澐への反論、自ら油素を用いて修正版を制作したことが語られる。黒川本第一跋では大きな変更点として褚摹系と定武系について論じた傍線部が削られ、代わりに「此其初本、今不可多得矣」の一節が加わる。この追加された一節は「この拓本は汪恠翻刻ではなく李宐原刻であり、今は多く得られない」の意味であり、これを信ずるかぎり翁方綱は黒川本第一跋を清書するまでの二日間にその見分け方を知ったことになる。現状、汪恠翻刻については実物の情報がなく、これ以上の資料が出現しないうちは翁方綱の言に従い、黒川本を原刻拓本としておく。やや参考になるのは、同石の拓本とみられる北京本が、汪恠翻刻よりもおそらく遡る張照の跋を伴っているという事実である。また、黒川本第一跋では文末一文が第二跋の話題を導くように変更されている。

ここで、王澐の批評の引用方法が異なることに注意を要する。前文においては、王澐『虚舟題跋』原文の該当箇所「用褚本縮成逕寸、刻於青石四面、細若蠅頭、而寬綽容与、能尽筆勢、以較原本、不失毫髮。此又玉枕後一奇玩也」をほぼ変更せず全文引用していた。これに対し、「跋施耦堂所蔵万松山房縮本蘭亭」では「以褚本縮成、不失毫髮」の二句のみ引用に絞られている。このことは、王澐による評のうち翁方綱が最も興味を示したのが「褚摹本を底本とし」「そっくりに出来上がったという部分で、残る「字が蠅頭のように細かいにもかかわらず余裕

があつて筆勢を發揮し尽くしている」のくだりは二の次に置かれたことを示している。より踏み込んでいえば、王澐の原文では「寬綽容与、能尽筆勢」という表現面に重点が置かれているように読めるが、ここでの翁方綱の引用は単に「褚摹本を原本とし、そっくり写した」となっており、何がどのように一致しているのかが削られている。さらに黒川本第一跋では、手稿の段階で存在した傍線部の「神氣是に近しと雖も」という表現面の美点を認める文言も削られる。その上で、「行次位置の移失、偏傍点画の舛訛」という点が原本と大きく異なることを指摘し、王澐の鑑賞眼に疑問を呈するのである。清朝書壇を俯瞰した時、王澐と翁方綱はともに帖学から碑学への転換期に活躍した学者として、同じ括りに入られることが多い。一方で、翁方綱が先代の碩学・王澐を頻りに批判していることはよく知られており、中には大きな主張の一致にもかかわらず、やや不当とも言うべき論点のすり替えによって自説の価値を高めようとする傾向も指摘されている<sup>(4)</sup>。ここでもそうした傾向が指摘できるが、「寬綽容与、能尽筆勢」といった表現面を重んじる王澐と、「行次位置の移失、偏傍点画の舛訛」といった正確性に注目する翁方綱の間に、確かな書学観の変化が横たわっていることもまた見逃せない。

第三の「又書耦堂玉枕本後」は、以上の経緯を総括し、「万松山房本」よりも「玉枕本」をよしとする意見を述べている。いわく、施学濂が「玉枕本」に続けて「万松山房本」も見せてくれた。王澐が原本と少しも違わないと絶賛した作品だが、筆法や行の配置に不正確なところがあり、「玉枕本」には遠く及ばない。「万松山房本」は蠅頭書で大変小さく書かれ、模本の類ではないが、それにしても三十、四十字もの誤りがあるといる。ここでも王澐の評は「以原本相校、不失毫髮」だけが引用される。手稿の二日後、黒川本第一跋を清書した翁方綱は、さらに六日後の

十月二十八日、「自跋番正万松山房縮本蘭亭」の後半をもとに「翁縮本」自跋を付している。なお、黒川本第二跋は年紀がなく正確な書写年月日は不明だが、原稿からの変更点でもある文末の「師宜官逕寸の意」の言及を介して話題が繋がっており、第二跋末に「侍御と細書に談及するに因り、因りて其の後に附書す」とあることから、第一跋の清書と同時の可能性が高い。第二跋の内容については本稿第四章で論ずる。

これ以降、翁方綱が「万松山房本」に言及した例を二つ見つけることができた。一つは乾隆六十年（一七九五）、「蠅頭書冊・耆儒澄鑑」（東京国立博物館、図5<sup>32</sup>）の制作に参加した際のものである。この作品は幅六ミリの罫線が引かれた小冊子に乾隆期の文人たち二十六人が寄せ書きしたもので、翁方綱はまず第一段として「万松山房本」評を再書し、三日後、第二段として乾隆四十七年当時のことを回顧している。また、その三年後の嘉慶三年（一七九八）、何元錫（一七六六〜一八二九）蔵する「万松山房本」にも簡潔な跋を寄せている。<sup>33</sup>

#### （四）「翁縮本」のゆくえ

「翁縮本」の肉筆原跡は現在確認できないが、制作翌年に劉墉（一七二九〜一八〇四）と宋葆淳（一七四八〜一八一七）の跋が寄せられ、さらに嘉慶二十年（一八一五）、劉彬華（一七七〇〜一八二八）ら四人の観款が付されたようである。その後、一つの原因から二種の刻石が作られた。すなわち、嘉慶二十一年（一八一六）に広州にて謝青岩が刻したもの（北京故宫博物院、図6<sup>34</sup>）と、咸豊三年（一八五三）に長沙にて汪蔚が刻したもの（東京国立博物館、図2）である。

ここで、李宓と翁方綱による縮本蘭亭の系統と現存拓本の関係をま

とめておく。まず、①万曆三十四年（一六〇六）、李宓が「万松山房本」を書して石に刻んだ。清初、王澐がこの石を入手し、その後②汪孟が複製を作った。次に、翁方綱は乾隆四十七年（一七八二）十月二十日に「万松山房本」を見て、これを底本として修正を加え肉筆「翁縮本」を制作した。この「翁縮本」は劉墉・宋葆淳らが跋したのち、③嘉慶二十一年（一八一六）に広州の謝青岩が、④咸豊三年（一八五三）に長沙の汪蔚が、それぞれ石に刻んだ。刻石は①〜④の四種があり、現存拓本のうち黒川本と北京本の「万松山房本」は①、北京故宫博物院的「翁縮本」は③、東京国立博物館の「翁縮本」は④の拓本である。②の拓本は管見の限りでは確認できなかった。

### 三 縮本蘭亭の正確性と筆意の表現

以上が「万松山房本」の制作から「翁縮本」が石に刻されるまでの文献上確認できる過程である。以下では、実際に作品を観察しながら文献の情報を検証しつつ、考察を加えていく。

#### （一）翁方綱「番正万松山房縮臨本」を読む

翁方綱は具体的に「万松山房本」のどのような点を不満としたのだろうか。以下、翁方綱が手稿「自跋番正万松山房縮本蘭亭」および『復初齋文集』巻二十七「番正万松山房縮臨本」において具体的に指摘する箇所を黒川本によって確認していく。以下各項のテキストは特に断りがない限り『復初齋文集』定稿によった。あわせて、「翁縮本」東博拓本を参照し、それらがどのように修正されているか確認する。また、蘭

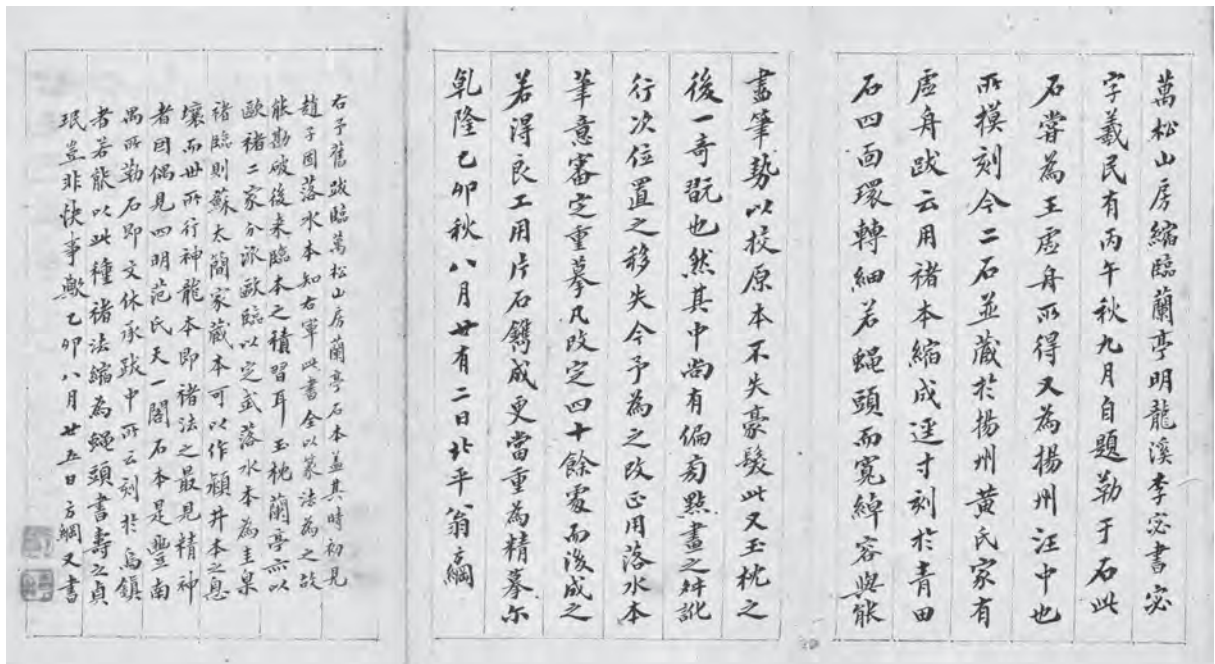


図5 「蠅頭書冊・耆儒澄鑑」  
のうち翁方綱第一段・第二段  
(1795年、東京国立博物館)

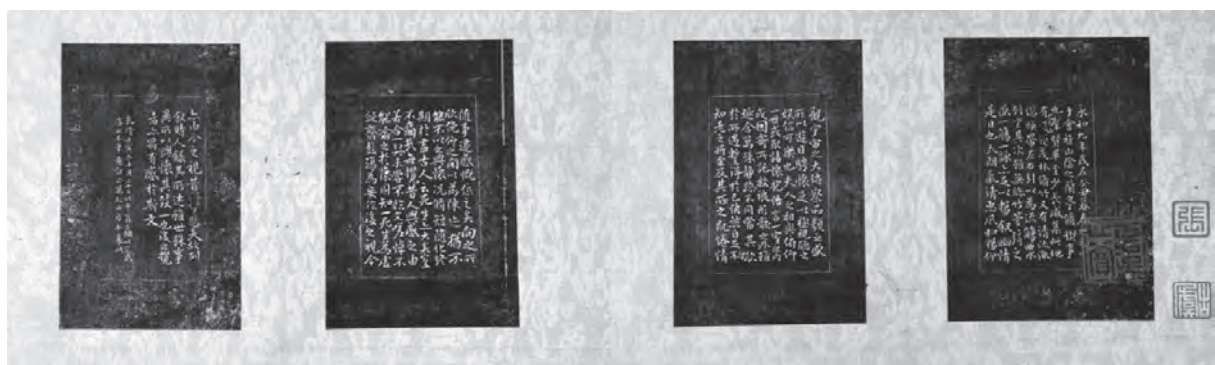


図6 「翁方綱縮本蘭亭序」  
(1816年刻、北京故宮博物院)

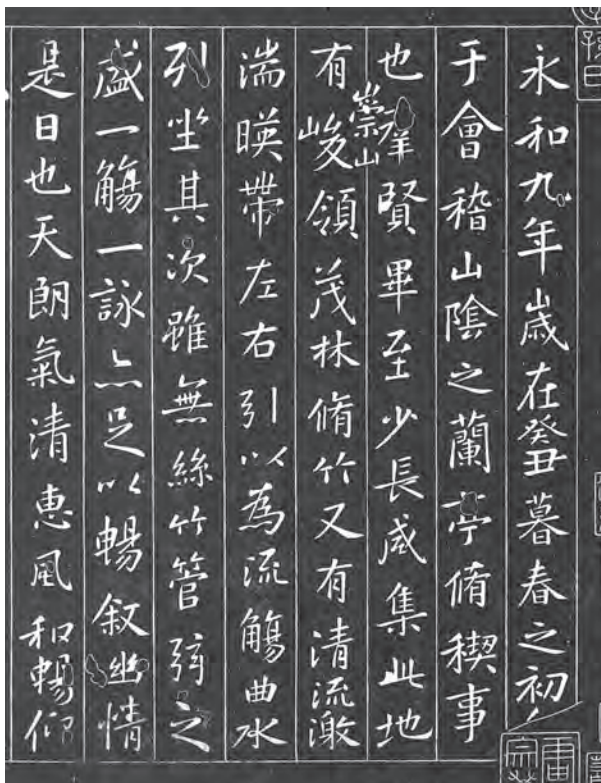


圖8 「定武蘭亭序·清內府摹刻落水本」(北京故宮博物院)



圖7 「定武蘭亭序·柯九思本」(台北故宮博物院)

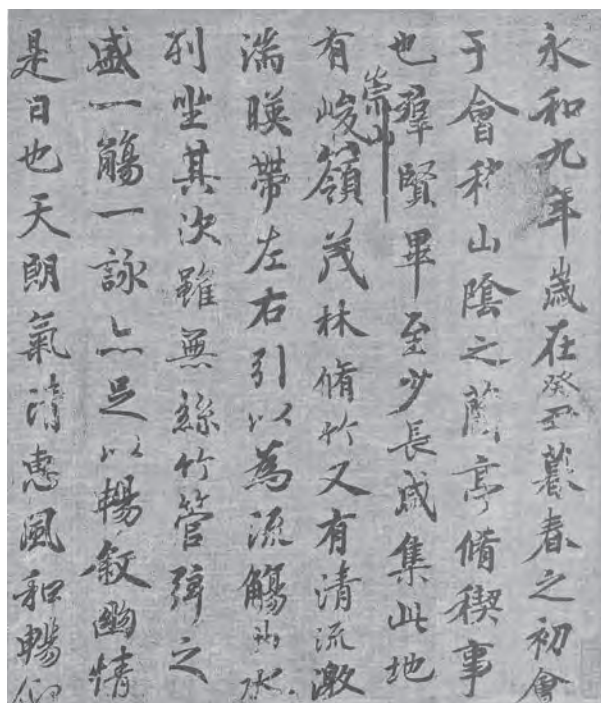


圖10 「褚遂良摹蘭亭序·黃絹本」(台北故宮博物院寄託)

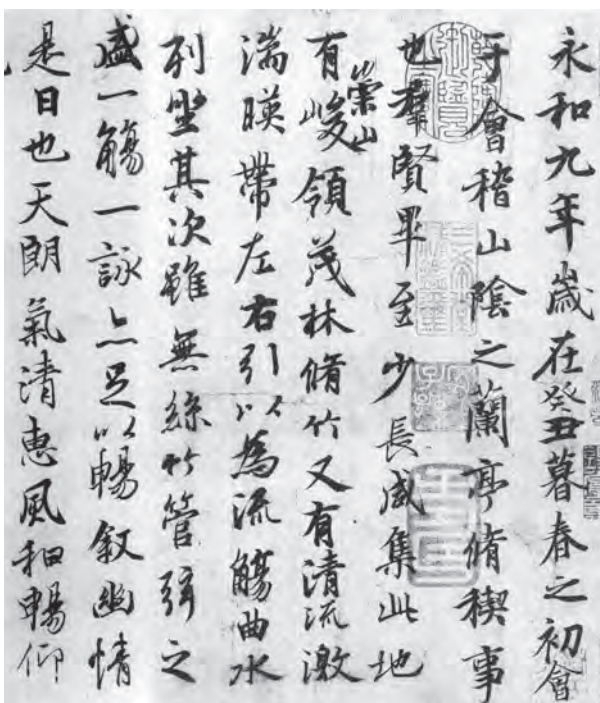


圖9 「馮承素摹蘭亭序·神龍半印本」(北京故宮博物院)

亭序主要諸本の該当箇所とも比較する。すべてを確認するのはやや煩雑と思われるかもしれないが、この作業自体、翁方綱の考証がいかに精密で微視的であるか、つまりはその最大の特徴を物語ることになるだろう。この作業を通して得られた材料をもとに、次節で二つの縮本蘭亭の違いを考察していく。

蘭亭諸本では、翁方綱が最も正統に位置つけた定武本拓本「落水本」が現蔵不明のため、現在定武本の真作である可能性が最も高いとされる「柯九思本」（台北故宫博物院、**図7**）を主とし、清代に「落水本」を模刻した「清内府摹刻落水本」（北京故宫博物院、**図8**）も参照する。広義の褚摹系とされるものうちでは、修正痕をよく止め原本に比較的近い搨模本とされる「神龍半印本（八柱第三本）」（北京故宫博物院。以下、神龍本。**図9**）を主な比較対象とする。「神龍本」は通常、馮承素模と紹介されるが、翁方綱は褚摹系に分類しているため本稿ではこれに従う。また、他の褚摹系では領を嶺に作る「領字従山本」としても知られる「黄絹本」（蘭千山館より台北故宫博物院に寄託。**図10**）を多く参照した。さらに、必要に応じてその他諸本にも言及する。比較図版は「万松山房本（黒川本）」「翁縮本（東博本）」「柯九思本」「神龍本」の順に示し、必要に応じてその他字例を後尾に付した。

① 第十行末錯移下一字（**図11**）

「万松山房本」では第十行末は「聴」、第十一行頭は「之」となっているが、正しくは「之」を第十行末に入れ、第十一行頭は「娛」から始めるべきだという指摘。翁方綱はそれ以上言わないが、黒川本を見るとここで生じた行のズレは後二行まで続いており、正しくは第十二行頭「仰」と第十三行頭「内」も前行末に収めるべきである。「翁縮本」では

いずれも修正されている。こうした行のズレは法帖類でしばしば見られる現象だが、ある程度原跡に近い蘭亭序の主要諸本には見られない。

② 第十八行末錯移上一字（**図12**）

第十八行末「能」は正しくは次行頭に送るべきという指摘。『復初齋文集』版本はいずれも「第八行」に作るが、手稿本は「第十八行」に作っており、黒川本を確認すると手稿本が正しいことがわかる。「翁縮本」では修正されている。主要諸本に異同はない。

③ 稽字下半誤移正中（**図13**）

第二行「稽」の「旨」部を下部中央におく異体字を用いるが、正しくは通常の偏旁の字体にすべきだという指摘。この異体字は鄭道昭「鄭文公碑」など六朝以来少なからず用例が見られるが、蘭亭序の主要諸本での用例はない。「翁縮本」では修正されている。なお、「黄絹本」では現在この「旨」の部分に欠損している。

④ 觴字誤易為易（二処）（**図14**）

第五行と第七行「觴」の旁下部を「易」に作るが、正しくは「易」だという指摘。この横画を省略する例は一般的にあまり見られず、主要諸本にはないが、楷書の（伝）欧陽詢「蘭亭記」に近い例として挙げられる。「翁縮本」では修正されている。

⑤ 叙字多一ノ（**図15**）

第七行「叙」の旁を「攴」に作るが、正しくは「又」であるとの指摘。翁方綱の指摘は概ね正しいが、「柯九思本」や「黄絹本」は「又」の横



画を独立させ、「神龍本」も右上の転折を大きく突出させて筆を返す。「翁縮本」は通常の「又」に作り、筆法の細部までは再現されていない。

⑥ 騁字馬下三点誤為一画(図16)

第十行「騁」の馬の四点を一本線に略しているが、正しくは三点に作るべきとの指摘。「翁縮本」では修正されている。ただし、「柯九思本」や「神龍本」は三点を打ちながら連綿し、「黄絹本」でもうねりをつけた一本の曲線に作る。一方、「清内府摹刻落水本」では連綿が切れているが、点の方向によって意連している。「翁縮本」ではこうした連綿の



図12 ②第十八行末  
(図11に同じ。以下、この四本を「四本」と呼称。)

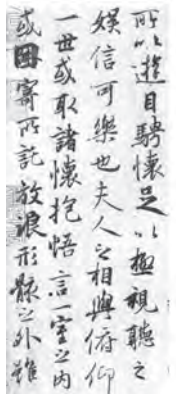
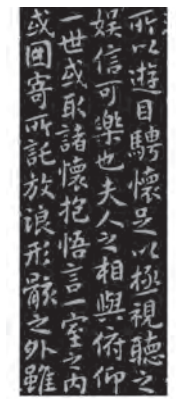


図11 ①第十行末  
(右上「万松山房本」、左上「翁縮本」、  
右下「柯九思本」、左下「神龍本」)



筆意が断たれている。

⑦ 蹠字左捺下半全失(図17)

第十四行「蹠」の旁下半が全く異なるという指摘。文中の「左」は正しくは「右」であろうと思われる。翁方綱のこの文章中には手稿・版本ともに「左」と「右」の誤表記が多く見られる。「翁縮本」では修正されている。「清内府摹刻落水本」や「神龍本」は「翁縮本」に似るが、左下への斜面を二面に分かつ。「柯九思本」や「黄絹本」では該当箇所が磨滅あるいは欠損し、確認しづらくなっている。



図16 ⑥騁  
(四本+黄絹本、  
清落水本)

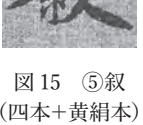


図15 ⑤叙  
(四本+黄絹本)

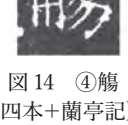


図14 ④觴  
(四本+蘭亭記)



図13 ③稽  
(四本+黄絹本、  
鄭文公碑)

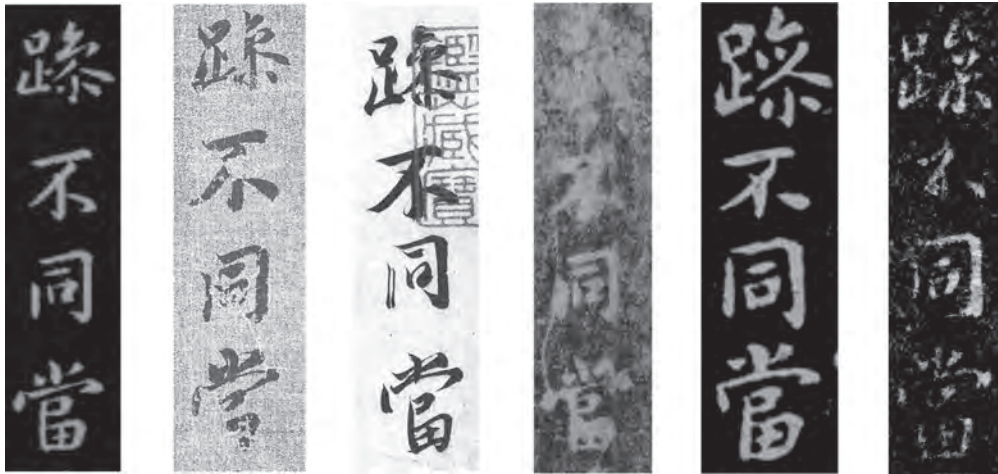


図17 ⑦～⑨踪不同當(四本+黄絹本、清落水本)



図18 ⑩⑪己快(四本+黄絹本、蘇太簡本)

⑧ 不同不字上面誤連(図17)

第十四行「不」の第一画と第二画が連綿しているが、離すべきであるとの指摘。「翁縮本」では修正されている。「之」など頻出する字が多種多様な形をとり、一つとして同じものがないことは蘭亭序の名品たる所以としてよく知られるが、確かにこうした頻出字の書き分けに関して「万松山房本」は無頓着なようである。

⑨ 当字右直誤断(図17)

第十四行「当(當)」の「口」と「田」の縦画は繋げるべきとの指摘。これも正しくは「右」でなく「左」かと思われる。「翁縮本」では修正されている。「黄絹本」では該当箇所が欠損している。

⑩ 己字誤己(図18)

第十五行「己」は、正しくは「己」であるとの指摘。「翁縮本」では修正されている。

⑪ 快字誤快(図18)

第十五行「快」は、正しくは「快」であるとの指摘。「翁縮本」では修正されている。主要諸本はほとんど「快」に作るが、「蘇太簡本(八柱第二本)」は両者の中間と言うべき字形になっている。なお、手稿では「快字訛快」に作る。手稿と版本の間で「誤」と「訛」の変更は多く見られるが、意味に影響しないため以下言及しない。

⑫ 不知不字上面誤連(図19)

第十五行「不」の第一画と第二画が連綿しているが、離すべきであ

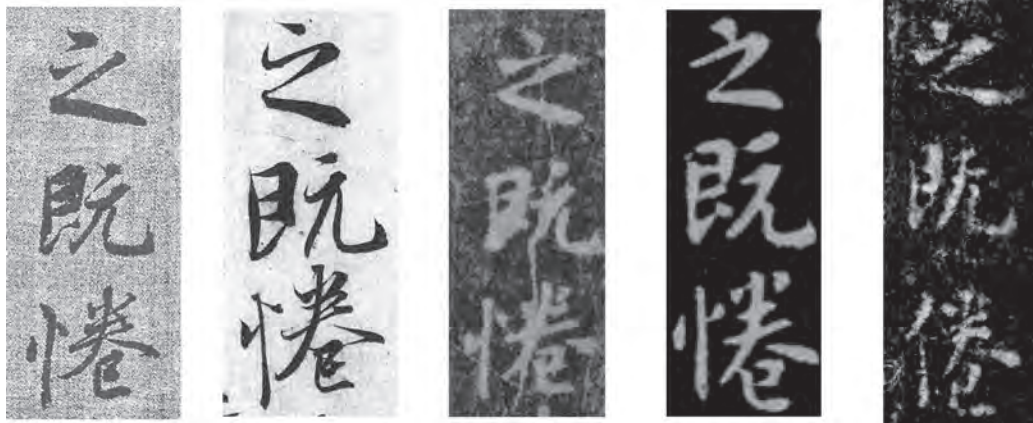


図21 ⑭~⑯之既倦 (四本+黄絹本)

るとの指摘。「翁縮本」では「清内府摹刻落水本」と同形に修正されている。

⑬ 老字上半折処誤断 (図20)

第十六行「老」の第三画と第四画が離れているが、連綿すべきであるとの指摘。「翁縮本」では修正されているが、主要諸本では第三画の収筆からやや上がり筆を返して連綿する筆勢を見せており、「翁縮本」の肩を落とす字形が正解とは必ずしも言えない。

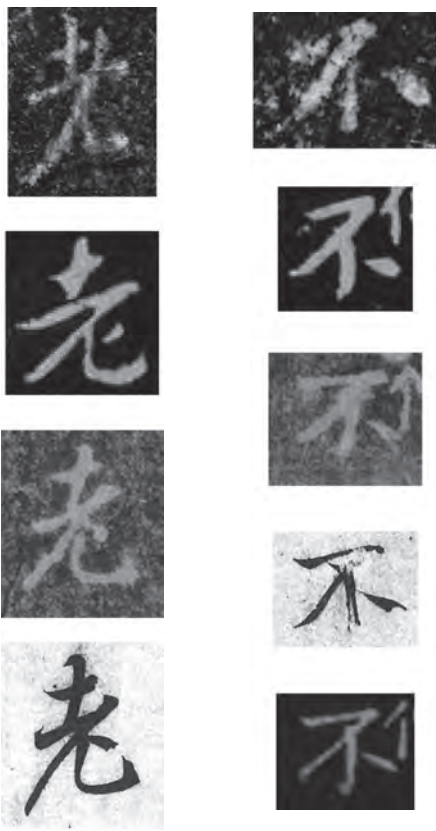


図19 ⑫不 (四本+清落水本)

⑭ 所之之字末筆全失 (図21)

第十六行「所之」の「之」は最終画が全く異なるという指摘。「翁縮本」では修正されている。

⑮ 既字左半全失 (図21)

「右」と「左」の表記揺れがあるため確定し難いが、第十六行「既」の偏旁どちらかが全く異なるという指摘である。実物で確認すると、偏の最終画にあたる点の有無と、旁を「元」に作るか「无」に作るかという二つのポイントが該当しうる。おそらく後者だろう。「翁縮本」ではいずれも修正されている。偏は定武本には点があり、「神龍本」では上の縦画と点が一体化しているように見える。「黄絹本」はこの箇所をねりを加える。旁は主要諸本では「元」に作る。「柯九思本」はこの箇所には傷があり見にくいだが、やはり「元」に作っていたと思われる。

⑯ 倦字誤イ (図21)

第十六行「倦」の偏を誤って人偏に作っているという指摘である。「翁縮本」では修正されている。主要諸本に異同はない。

⑰ 遷字中訛加横 (図22)

第十七行「遷」は「大」の横画が不要であるとの指摘。この箇所は東博拓本で確認する限り、「翁

縮本」でも修正されていないようである。

⑱ 尽字中間誤多一横 (図23)

第二十行「尽(盡)」は縦画へ移行する直前の横画一本が不要であるとの指摘。「翁縮本」では定武本と同形に修正されている。

⑲ 死字左誤已(二処) (図24)

第二十行と第二十三行「死」の右下部は「已」でなく「匕」に作るべきとの指摘。「翁縮本」では修正されている。

⑳ 亦字誤作三点(惟楮本或有作三点者) (図24)

第二十行「亦」の下部は三点でなく四点に作るべきであるとの指摘。「翁縮本」では修正されている。これは南宋・姜夔「偏傍考」からすでに指摘されている特徴である。<sup>(26)</sup> 確かに定武本や「張金界奴本(八柱第一本)」は四点に作るが連綿している。「神龍本」や「黄絹本」は連綿して三点に作る。なお、翁方綱はこの点に限っては定武系・楮摹系の間にもそもそも差異が認められると後に付記している。しかし、ここまでに見たように翁方綱の諸論点は他にも諸本の揺れが確認できるものがある。「翁縮本」は連綿を断つて四点に作るが、連続する筆意の再現という点では「万松山房本」も必ずしも劣らない。

㉑ 昔人昔字下日誤作草書 (図25)

第二十一行「昔」の「日」を草書風の丸みを帯びた形に作るが、四角形にするべきとの指摘。「翁縮本」では修正されている。「黄絹本」ではここが欠損している。

㉒ 之由之字誤作草書、後二之字亦然 (図26)

第二十一行末・第二十三行・第二十七行「之」は草書でなく行書に作るべきとの指摘。「翁縮本」は「万松山房本」と異なり、「之」の行書・草書の区別までは厳格に行なっているが、原跡のように全ての「之」を書き分けるには至っていない。

㉓ 嘗字末筆誤出太長 (図27)

第二十二行「嘗」の下部で線が突き出しているが、正しくは「甘」に作るべきとの指摘。「翁縮本」では修正されている。「黄絹本」は該当箇所が欠損している。

㉔ 未嘗不字全失 (図27)

第二十二行「未嘗不」の「不」の字形が全く異なるという指摘。「翁縮本」では修正されている。「之」に比べると、「不」の書き分けは「翁縮本」ではかなり正確に実践されている。「黄絹本」では欠損している。

㉕ 不能喻之不字誤連 (図28)

第二十二行末の「不」の第一画と第二画が連綿しているが、離すべきであるとの指摘。黒川本を確認すると、翁方綱の主張は正しくは「離れているが連綿すべき」だと思われる。「翁縮本」では修正されている。しかし、「万松山房本」の線の強弱の変化も筆勢をよく表しており、第二画の下部と第四画を重くしてバランスをとる点では「神龍本」の変化に富む筆意の面影すら感じられる。

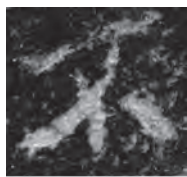


图 28 ⑮不

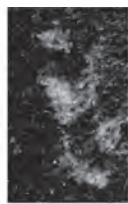


图 26 ⑳之



图 25 ㉑昔  
(四本+黄絹本)



图 23 ⑳盡

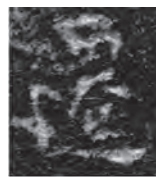


图 22 ㉑遷



图 24 ⑳㉑死生亦 (四本+黄絹本、清落水本、張金界奴本)



图 27 ㉑㉒嘗不 (四本+黄絹本)



図29 ②⑥ 喻



図30 ②⑦ 虚  
(四本+黄絹本)



図31 ②⑧ 視  
(四本+黄絹本)

②⑥ 喻字失一横 (図29)

第二十三行「喻」の旁上部の横画が一本になっているが、正しくは二本との指摘。「翁縮本」では修正されている。

②⑦ 虚字下半全失 (図30)

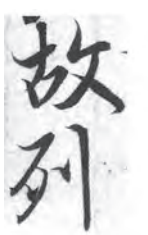
第二十三行「虚」の下部を「丘」に作るべきであるとの指摘。「翁縮本」では修正されている。「黄絹本」では欠損している。

②⑧ 視昔視字ネ誤為ネ (図31)

この箇所は『復初齋文集』版本の異同が多いが、手稿を参照すると、第二十五行「視」の偏を草書で書くべきところを楷書にしているという



図32 ②⑨ 故列



指摘であるとわかる。「翁縮本」では修正されている。「黄絹本」では欠損している。

②⑨ 故列故字末筆、列字末筆皆失 (図32)

第二十五行「故列」二字の最終画が全く異なるという指摘。「翁縮本」では修正されている。「列」最終画は南宋・趙希鹄『洞天清禄集』にも言及がある<sup>⑩</sup>。ただし、「翁縮本」では「列」の傍の一目目を文字の中央に置く字形をとり、この画を偏に寄せる「万松山房本」の方が本来の分間に近い。

③⑩ 致字、攬字、将字皆全失 (図33~35)

第二十七・八行「致」「攬」「将」はいずれも全く異なるという指摘。「翁縮本」では修正されている。

これら具体的な指摘に続けて翁方綱はいう。

以上は就ち其の顕然たる失誤する者なり。已に三十五処の多き有り、其の細微曲折の肖る能はざる者に至りては、則ち字字之有り。此の内止だ「死生亦大矣」の「亦」字のみ、惟だ楮本のみ或ひは三点に作る者有れども、其の餘は則ち欧・褚並びに岐出すること無し。此の本の失、楮本を以て誘はずを得ざるなり。(翁方綱『復初齋文集』卷二十七)

いわく、ここに具体的に述べた三十五箇所<sup>⑪</sup>の明らかな誤り以外にも、

細かく見れば似ていない部分ほどの字にもある。⑳亦の三点のみ、褚摹本にこのような形をとるものがあるが、他は定武本も褚摹本も同様である。「万松山房本」の誤りはただ褚摹本によったせいではない。

しかしここまでの観察で、実際には蘭亭諸本のゆれは多くの箇所指摘でき、中には李宓の字に近いものも見出された。概して言えば翁方綱の指摘は正しく、「翁縮本」ではその言の通りに修正されているが、例えば⑥騁や⑪快は褚摹系に「万松山房本」と近いものが見られ、⑬老や⑰遷は「翁縮本」が正しいとは必ずしも言えない。また、⑲不や⑳列など、筆意の表現や分間の取り方では「万松山房本」のほうが原跡の意図を汲んでいる箇所も多く見られた。総じて言えば翁方綱が定武本によって修正を加えたことは事実のようであるが、「万松山房本」に備わっていた筆意の表現は「翁縮本」ではむしろ退行していると言える。



図 33 ⑳致



図 34 ㉑攬



図 35 ㉒将

## (二) 李宓と翁方綱の縮模態度の相違

ここからは以上を踏まえた筆者の観察を述べる。

翁方綱に酷評された「万松山房本」だが、黒川本によって観察すると、蘭亭序一字一字の特徴もある程度よく写し取り、刻も大変精細で、線の肥瘦や筆意がよく表されている。例えば第四行「茂」(図36)では、左下への払いに筆の穂先や弾力が利いており、さらに戈法を強調することで長脚の結体に作り、「神龍本」に見られるような筆意をよく汲み取っている。第五行「引」(図37)では偏と旁に段差をつけ、偏の筆の折り返しに肥瘦・長短を交えており、変化に富む筆意をよく再現している。第二十行「豈」(図38)では、一字中で書き進めるに従い前傾姿勢になっていく特徴をよく捉えている。こうした蘭亭序の筆意の変化、動的な字形を汲み取る点では、「万松山房本」はむしろ「翁縮本」に勝っているように思われる。字の周囲も広々としており、翁方綱が黙殺した王澐の「寛綽容与、能尽筆勢」という評は、むしろその長所をよく言い表していたことがわかる。

李宓の書が翁方綱の言うほど悪くないという事実は、翁方綱の愛弟子・宋葆淳が「翁縮本」に寄せた二つの跋にも読み取れる。宋葆淳の第一跋は、「蠅頭小字本は李宓に始まるが、すでに蘭亭の真面目を留めて

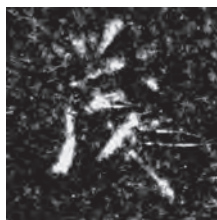


図 36 黒川本「茂」

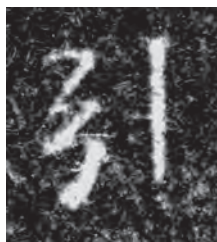


図 37 黒川本「引」

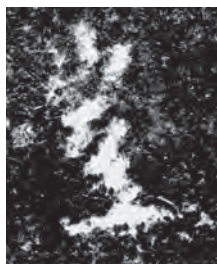


図 38 黒川本「豈」

いない。後世これに倣うものは多いが、ますますかけ離れている。翁方綱は自らの手でこの冊を書いたが、…（中略）…李宓のものに比べて二倍、五倍も優れている。もし好手に石に刻んでもらい伝えることができれば、これこそ王澐のいう玉枕後の一奇玩という言葉にふさわしいではないか<sup>(39)</sup>と、「万松山房本」を完全否定する勢いである。しかし、第二跋では「最近、万松山房が楷書淵明飲酒詩二十首を小さな石に刻んだものを見た。工細絶倫、自ら紙に拓本を取ろうとしたが叶わなかった。思うに李宓は小字を刻するのが上手だったが、臨模を得意としなかったのだらう<sup>(40)</sup>」と、李宓の小字刻石の実力を認め、臨摸がうまくなかったという妥協的な結論に至っている。

一つ注意すべきは、翁方綱は定武本、中でも「落水本」を蘭亭の第一としたのに対し、李宓の生きた明末は豊坊や董其昌らを中心として広義の褚摹系諸本や「神龍本」、「張金界奴本」などが珍重され、それらの翻刻が法帖により出回った時代だったということである<sup>(41)</sup>。「万松山房本」の底本について、王澐と翁方綱は褚摹系といい、張照は定武系というが、実物の観察と時代背景から考えてやはり広義の褚摹系に属する可能性はあるだろう。

では、この「万松山房本」の底本となった蘭亭序はいかなるものであったか。最も手掛かりになりそうなのは幾つかの特徴的な異体字である。特に翁方綱の指摘でいう③「稽」、⑦「躁」、⑳「嘗」は、このような字体を用いる蘭亭序を寡聞にして知らない。やや注目されるのは、これらの文字がいずれも「黄絹本」の現状で欠損しているという事実であり、この系統が元になった可能性も考えてみたが、特定に至らなかつた。そもそも「黄絹本」が属する「領字従山本」系は、系統名の由来となった第四行「領」を「嶺」に作るほか、第六行「次」をさんずいにする、第



図39 文震孟「臨蘭亭序扇面」  
(1610年、北京故宮博物院)

十三行「因」の内側を空白あるいは「七」に作るといった特徴がある。これらの文字遣いは「万松山房本」には認められない。とはいえ、そもそも蘭亭序諸本には、こうした絹本・紙本の欠損や、それを再現した刻石の意図的欠損、さらには経年による石の磨滅・断裂といった現象が多く見られ、李宓がそういった欠落の多い蘭亭序を参照した可能性は念頭に置くべきだろう。

しかし、それ以前に、「万松山房本」自体がそもそも特定の一底本を正確に写したのではない可能性も考えられる。その制作にあたり、テキストが通じさえすれば、異体字や行書・草書の変換は許容されていたのかもしれない。例えば③「稽」の異体字は文震孟（一五七四～一六三六）の「臨蘭亭序扇面」（北京故宮博物院、**図39**）にも用いられているが、この扇面では全体にわたって行書・草書・異体字の入れ替えが随意に行われている。文震孟が蘭亭序の文字遣いを知らなかつたはずはなく、もとより蘭亭序の正確な再現を狙ったものではないことがわか



る。こうした臨書のあり方も明代には普遍的に存在していた。董其昌による蘭亭の臨書論においても「形を似せれば似せるほど遠のく」という逆説的な論が見られる。<sup>42</sup>これは字形以上に蘭亭の自由な筆遣いを重視する主張で、臨書の評価基準が本来的に字形の正確さだけに限られるものではないことを示している。

翻って、翁方綱はこうした明人の一種気ままな臨書態度に対し常に批判的である。これは何も李宓「万松山房本」に限ったことではなく、その矛先は大家である文徵明や董其昌にも等しく向けられている。<sup>43</sup>

此の臨本は定武と題すと雖も、然れども止だ大意を取るのみ。後に自ら「嘉靖戊午二月、是年秋九月、衡山譚崇久藏する所の五字不損本を臨す」と題し、小楷を以て自ら後に識す。此の臨する所未だ是れ何本なるやを知らず。(翁方綱『復初齋文集』手稿<sup>44</sup>)

文敏の背臨蘭亭、乃ち純ら己意を以て之を行ふも、尚ほ褚臨本の刻画に過ぐるを嫌はんか。実は則ち褚臨本即ち己意多く、而れども古法少なきを覚ゆ。吾嘗て文敏の「詩書画家は名を成して後、復たと摹倣せず」と言ふを宝とするも、或いは多く杜撰ならん、此れ吾が輩の午夜鐘声なり。(翁方綱『復初齋文集』手稿<sup>45</sup>)

前者ではさらに、「この臨本によって見る限り、「崇」の山の下に小点がなく、「帯」の上四本の縦画はみな並行で、「死生亦大矣」の「亦」も四点ではなく三点に作っており、どれも定武本とは合わないのに、最初の行の「会」の欠けだけを再現している<sup>46</sup>」と付記されている。こうした明人の臨書態度を背景として、改めて李宓「万松山房本」を見ると、その

狙いはもとより原本の寸分違わぬ再現ではなく、「玉枕本」を超えた極小字に筆意を込めることにこそ重点があったと思われる。翁方綱が指摘した細かな字体の一致までは、当初から求めていないのである。

とはいえ、翁方綱の批判は蘭亭序の真相を追究しようとする厳密な考証に裏打ちされ、客観的に成立するところが多いのも確かである。彼の文章にはしばしば明人や王澐よりも学問の高みに到達したという自負が窺えるが、こうした美術品の復古に学的正確性を追究する態度は、乾隆期の文人に広く見られる時代的傾向でもある。

「翁縮本」も黒川本と比較しながら観察すれば、文章中で明記されていない数多くの修正点を見出すことができる。中でも大きな変更点として、元々が原稿である蘭亭序の修正箇所や「定武本」刻石の欠損までもが再現されていることが注目される。例えば第一行末の「会」(図40)や第三行「群」(図41)は定武本の石の欠損を何も書かないことによつて示しており、第十三行「因」(図42)、第十七行「向之」(図43)、第二五行「夫」(図44)、最終行「文」(図45)では書き改めた痕跡を再現している。第十四・十五行間の「僧」(六朝・梁の鑑識家、徐僧権の押署。図46)も追加されている。第二五行「昔」と「悲」の間の取り消しも反映している(図47)。「万松山房本」はこれらの再現は試みておらず、定武本の極小版コピーを作ろうという翁方綱の強固な意志が窺える部分である。なお、「玉枕本」(図1)でもこの種の定武刻石の再現が試みられている。他にも翁方綱が『蘇米齋蘭亭考』で注目している第三・四行間の「崇」の点を三点に作る(図41)などの諸点も実践されている。乾隆六十年(一七九五)、「蠅頭書冊・耆儒澄鑑」(東京国立博物館、図5)<sup>47</sup>の制作に参加した際、翁方綱は十三年前に「万松山房本」を見て修正した時のことを回顧している。



図43 翁縮本「向之」



図42 翁縮本「因」

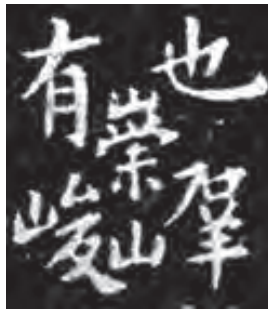


図41 翁縮本「群」「崇」

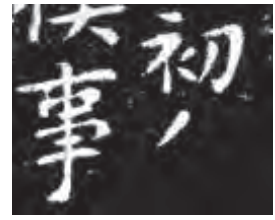


図40 翁縮本「会」



図44 翁縮本「夫」

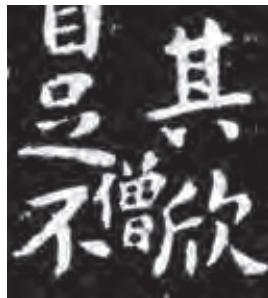


図46 翁縮本「僧」



図45 翁縮本「文」



図47 翁縮本「昔悲」

右は子の旧臨万松山房蘭亭石本に跋せるものなり。蓋し其の時初めて趙子固落水本を見、右軍の此の書全く篆法を以て之を為るを知る、故に能く後來臨本の積習を勘破するのみ。玉枕蘭亭、亦た欧褚二家を以て分派す。欧臨は定武落水本を以て圭臬と為し、褚臨は則ち蘇太簡家藏本以て頼井本の息壤と作す可し。而れども世に行はるる所の神龍本、即ち褚法の最も精神を見ず者なり。偶たま四明范氏の天一閣石本、是れ豊南禺の勒石する所にして、即ち文休承跋中に云ふ所の烏鎮に刻する者を見るに因り、若し能く此の種の褚法を以て縮して蠅頭書と為し、之を貞珉に寿すれば、豈に快事に非ずや。

〔蠅頭書冊・耆儒澄鑑〕翁方綱第二段<sup>(48)</sup>

これによると、「万松山房本」批評は初めて「落水本」に出会い、王羲之の書が篆法によっていることを知った直後のものであるから、「後來臨本の積習」を見破ることができたという。そして、褚摹本によって縮本を作ること肯定し、「神龍本」を「褚法の最も精神をあらわす者」として手本に推奨する。この文章からは、翁方綱の批判は「万松山房本」単体というよりそれまでの杜撰な臨本すべてに向けられていたこと、「翁縮本」が筆意を抑え気味にするのは「落水本の篆法」に傾倒したためであること、翁方綱も褚摹系の筆意を全く重視していないわけではないことが読み取れる。ちなみに、同冊中の伊秉綏「縮臨蘭亭序」(図48)は小さいながらも懐を広く囲い、顔法を取り入れた巧みなものだが、行次を守らないのはもとより、「快」を「快」に作るなど、翁方綱が「万松山房本」に向けたのと同じ厳しきをもつて見れば問題は多い。翁方綱ほどの正確性を求めるのは、当時としても特異であったと思われる。

さて、本章の最後に、刻の精粗という問題について補記しておきたい。

というのも、本節では李宓と翁方綱の縮本蘭亭を拓本によって比較してきたが、それとは別に、書を石に刻する際の技術の差も考慮すべきと思われるからである。次章で観察するように、翁方綱の小字の実力は本来、李宓に勝るとも劣らない。むしろ「翁縮本」の刻者が小字の筆意を写しきれていない可能性がある。翁方綱は「翁縮本」自跋に「いつか私のために寸石に刻してくれる良工がいれば」と記していたが、現在確認できる「翁縮本」のうち咸豊三年汪蔚刻本は翁方綱没後の刻、嘉慶二十一年謝青岩刻本も葉夢龍が依頼したもので、おそらく本人は関与していない<sup>(49)</sup>。翁方綱は良工に出遭えなかったのではないか。

実は、容庚（一八九四〜一九八三）が民国二十九年（一九四〇）に著した「蘭亭五記」も、「万松山房本」と「翁縮本・謝青岩刻本」と「翁縮本・汪蔚刻本」の三つの拓本を比較し、類似の結論に至っている。

余落水本を以て之に校ぶるに、其の失は誠に翁氏の言ふ所の如し。然れども翁氏の訂正両刻本を以て之に校ぶるに、点画は失はずと雖も、反って此の本の神を得るに如かず。王澐云ふ所の「寛綽容与、能尽筆勢」の言は虚ならず、故に李宓の技遠く謝青岩・汪蔚の輩に勝れるを知るなり。（容庚「蘭亭五記」<sup>(50)</sup>）

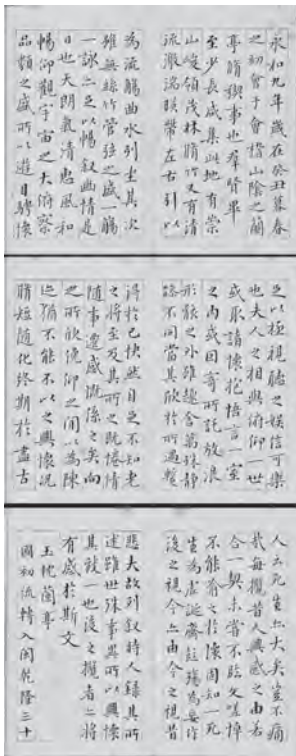


図48 「蠅頭書冊・耆儒澄鑑」のうち伊秉綏「臨蘭亭序」（1792年、東京国立博物館）

こうした視点からは、「翁縮本」拓本を彼の小字の代表的作品と見なすのは翁方綱にとって不本意な評価であるかもしれない。彼の精細極まりない小字の実力は、肉筆作品によってこそ観察されうるだろう。

#### 四 翁方綱第二跋と蠅頭書の評価

黒川本第二跋は他の書物に載っていない翁方綱の小字論である。第一跋末尾に「師宜官選寸の意」について言及していたが、第二跋ではこれを承け、小字作品の歴史へと話題が展開される。すでに翻刻を載せたが、ここで改めて訓読する。

昔人師宜官の選寸千言を謂ひ、而して宋人選尺の紙内に於て七万字を作ると言ふ者有り、此れ則ち何ぞ師宜官に減ぜんや。吾見る所は唐人小楷、数尺仏幢の上に二万字を写すに至りて止む。尚ほ未だ一尺の内に七万字を写す者を見ざるなり。然れども其の妙処、元より豪放なること大字の如きに在るのみ。棘端刺猴以て能と為すに在らざるなり。侍御と細書に談及するに因り、因りて其の後に附書す。北平翁方綱。（黒川本・翁方綱第二跋）

漢の師宜官は選寸のうちに千字を書くことができ、宋人には選尺のうち七万字を書いたというものがある。実際に見たところでは唐人が小楷二万字を書いた数尺の仏幢が上限で、一尺に七万字も書いたものは見たことがない。しかし、小字の要点はそもそも大字のように豪放に書くことにある。棘の先に猿を彫刻するようなものを上手だと考えるのではない。施学濂と細書について話したので後に付記した、という。

この全文は、その話題展開からみて陳標『負暄野録』巻下「論細字説」<sup>(51)</sup>「総論作大小字」を下敷きにしている。該当箇所は次の通り。

論細字説…漢師宜官善書、大則径丈一字、細則方寸千言。又晉衛巨山論書云、其大徑尋、細不容髮、迫而察之、心乱目眩。嘗觀東坡題蓮經前注云、經七卷、如筋羸。故其語云、卷其盈握、沙界已周。讀未終篇、目力俱廢。乃知蝸牛之角可以戰蠻触、棘刺之端可以刻沐猴。黃長睿跋細字華嚴經亦云、書是經者、尺紙作七万字。余謂、七卷之軸如筋猶或可書、至於尺紙作七万字、誠為難事。若以宜官方寸千言概之、已為有餘。此說殊不近人情、恐決無是理。余不敢以為然。

総論作大小字…昔人云、作大字要如小字、作小字要如大字。蓋謂大字則無如小書之詳細曲折、小字則終無大字之体格氣勢也。刊勒之工、仍有善展字、不拘字之大小皆可遞展。其法以刀鑿去紙存墨、就灯傍印之、去灯愈近、則其形愈大、自尺至丈、惟意所定。然後展紙于壁、模勒其影、既小大適中、且不失体勢、亦良法也。

冒頭に引かれる師宜官とは後漢・靈帝の時期の書家で、大字・小字ともによくしたとされる。『負暄野録』の記述はさらに『晋書』卷三十六に引かれる衛恒「四体書伝並四体書勢」に「靈帝好書、時多能者、而師宜官為最。大則一字径丈、小則方寸千言、甚矜其能」とあるのによる。また、宋人云々というのは黄伯思（一〇七九〜一一一八）の『東觀餘論』巻下に載る「跋細字華嚴經後」<sup>(52)</sup>のことである。そこでも黄伯思はまず師宜官を引き合いに出し、華嚴經の筆者を「殆んど宜官の法を得るなり」と称賛している。ただし、陳標はその実在を疑っている。蘇軾（一〇三六

（一一〇一）の語は原詩が「跋王晋卿所藏蓮華經」として『文章辨体彙選』<sup>(53)</sup>等に載っている。そこに登場する「蝸牛之角可以戰蠻触、棘刺之端可以刻沐猴」の一節は、前半は元來「莊子」「則陽」にお

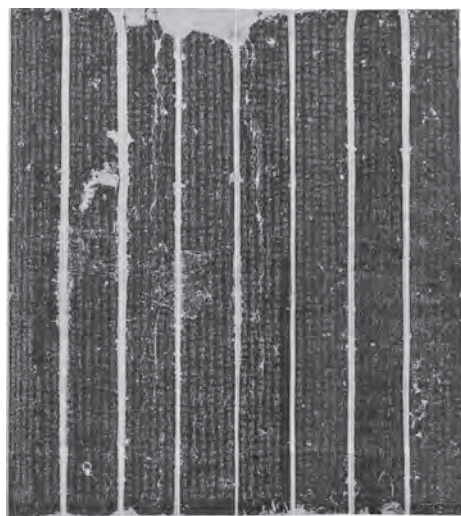


図49 「唐咸通經幢拓本」（唐、東京国立博物館）  
翁方綱が見たものではないが、参考に付した。

いて戴晋人が魏・斉の争いを「かたつむりの角の上で蛮・触の二国が争う」と喩えたのを転用し<sup>(54)</sup>、極小の中にも確かに広大な世界があるのだという。後半は『韓非子』「外儲説左上」にいう、小さく精巧なものを好んだ燕王にイバラの棘に猿を彫刻することを約束し気を引いたが、結局虚言であったという故事にもとづいて、これまた「蓮華經」の極小字を見れば不可能な話ではないと言っている。張照の「万松山房本」北京本への跋もこの「棘刺沐猴」を引いてその技量を称えている<sup>(55)</sup>。また、「大字を作るは小字の如くなるを要め、小字を作るは大字の如くなるを要む」は米芾（一〇五一〜一一〇七）の『海岳名言』による<sup>(57)</sup>。

以上を踏まえて翁方綱の黒川本第二跋を読んでみると、まず「師宜官の逕寸千言」と「宋人華嚴經の逕尺七万字」が文献上確認できる小字を詰め込んだ逸話として引かれ、陳標がその実在に疑義を呈するのに応えて、翁方綱も逕尺七万字は見たことがなく、唐代仏幢（図49）の数尺二万字が上限であると言う。小字の極意は、米芾に賛同して「大字のように豪放であること」を肝要とし、蘇軾や張照が褒めた「棘刺沐猴」の

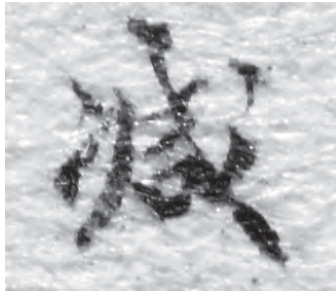


図 54 翁方綱第二跋「減」  
約 22 倍大



図 52 翁方綱第二跋「見」  
約 22 倍大



図 50 翁方綱第二跋「昔」  
約 22 倍大

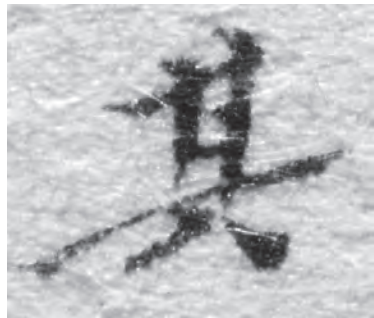


図 55 翁方綱第一跋「其」  
約 16 倍大



図 53 翁方綱第二跋「耳」  
約 22 倍大



図 51 翁方綱第二跋「之」  
約 22 倍大

ような極小の細工は必ずしも重要でないとしている。この価値観はそれら細工を「つまらぬこと」や「無用のもの」とみなす『莊子』・『韓非子』の原義に立ち戻り、芸術論としても単に職人的な精巧さを追求するのではなく筆法を具備することが肝心であるとする考えを表明している。

そして、この翁方綱第二跋は書法作品としても、まさに内容が示す通りの小字の理想を実現している。名のある古典的書家の肉筆としては最小クラス、毎字一ミリほどの書であるが、拡大してみるといかにゆとりを持って書かれているかがわかる。

たとえば一字目「昔」(図50)では、上半二本の横画に三倍ほどの長さの変化をつけている。小ささのみを求めるならば、短い方の横画に揃えれば幅を三分の一まで抑えることができるのだが、この書においてはそういった無理な詰め込みは意図されていない。長横画は自然な曲線を描き、起筆の軽い打ち込み、ゆったりとした収筆も通常の小楷と同じリズムでこなされる。「昔」の下半部、「日」の一面目は左上から側筆気味に打ち込んで厚みのある縦画とし、二面目は転折部を細めて内側を懐広く囲い、三面目はやや下、四面目はやや右に寄せて線の方向に変化をつけている。これによって線の集まる箇所が窮屈にならず、なおかつ力強く安定した結体につづいている。他にも「之」(図51)、「見」(図52)、「耳」(図53)の各最終画や「減」(図54)の戈法には筆の弾力を十全に発揮した払い・撥ね・打ち込みが見られる。また、第一跋では「其」(図55)の長横画に隸書風の波磔も作っている。これらがいかに驚くべきことかについては、原寸図版(口絵3)をあわせて参照されたい。実のところ、三ミリ程度の小字を詰め込むだけならば常人にも修練次第で可能だが、それ以下の極小サイズに計算され尽くした結体と美しく正しい筆法を発揮した例は非常に珍しく、まさに驚嘆に値する。

翁方綱が異常なまでに細密な小字をよくしたことは、当時の文献でも驚きをもって語られている。

相伝ふるに翁覃溪学士、垂老すれども康強にして、目力尤も勝れり。六七十の時、猶ほ能く灯下に於いて細書を作り、蠅頭字を閲るに謬鍵に仮りず。毎歳元旦、必ず西瓜子仁を用て四楷字を書し、五十後にして曰く「萬壽無疆」、六十後にして曰く「天子萬年」、七十後に至りても猶ほ能く「天下太平」と写すと云ふ。異稟と謂ふ可し。『翁氏家事略』の記載するを按ず。英和按じて云はく、「先生毎に一粒の胡麻上に於いて一片冰心在玉壺の七字を作る」と、則ち尤も神技為り。(陳康祺『郎潛紀聞』卷九)<sup>58</sup>

翁方綱は年老いてなお健康で視力がよく、六、七十歳になっても灯りのもとで小字を書き、小字を読むのにも眼鏡を必要としなかった。元旦にはいつもスイカの種に楷書で四字句を書した。五十代で「萬壽無疆」、六十代で「天子萬年」、七十代になっても「天下太平」と書くことができた。また、英和(一七七一一一八四〇)によると、翁方綱は一粒のゴマに「一片冰心在玉壺」と書くことができたという。この文献、半ば伝說的に捉えられる向きもあるが、黒川本第二跋を見る限り決して無理な話ではない。また、この文章の興味深いところは、さしもの翁方綱も年齢とともに書ける字が少しずつ簡単になっていくところである。そして黒川本の跋はまさに彼の五〇歳、この文献からすれば全盛期の書と考えられる。

これと比較すると、「蠅頭書冊・耆儒澄鑑」に収められた翁方綱の小字(図5)は六十三歳作であり、ともに彼の小字書法の年代変化を観察

する資料となりうる。この小冊には翁方綱の書が二段収録されているが、幅六ミリの罫線内に第一段は各一行、第二段は各二行を収め、字幅は前者が約三ミリ、後者が約二ミリである。第一段は黒川本第一跋と書風が近く、翁方綱の通常の楷書と共通する特徴も窺える。第二段は黒川本の第一跋と第二跋の中間のサイズだが、筆法や分間の緻密さは伯仲している。

小字を敷き詰める文物は、純粋な書法作品に限らなければ、工芸品や仏教美術などにも多くの例がある。民国十九年(一九三〇)には他ならぬ「万松山房本」と「定武落水本」の筆意をあわせて刻んだ「万松蘭亭硯」(図56)<sup>59</sup>が王禔(一八八〇—一九六〇)・賀其蘭・黄肇豫(一九〇五—六五)・呉迪生らによって制作されている。他にも、文房器具の裝飾に小字は甚だ好まれており、当研究所の「蠅頭書筆」(図57)にも最小の箇所ではぼ一ミリ程度の文字が刻されている。また、科挙のカンニング用と言われる「夾帶衣」(藤井齊成会有鄰館、図58)や坊刻小本『増広四書備旨』は、小さな字を詰め込むことに実用的意義がある。幅に限りのある漢代以前の簡牘にも極小の文字がしばしば見られる。黄伯思が見たという「細字華嚴經」や翁方綱が見た「唐人小楷仏幢」、日本にもいくつかの作例がある「宝塔曼荼羅」などは、写経行為自体に宗教的意味を見出す仏教文化の中にある。<sup>60</sup> また、二十二幅の宋元画縮図を収める董其昌題「小中現大冊」(台北故宫博物院)、<sup>61</sup> 漢代の百の石碑を縮模し刻した王子若刻「百漢硯碑」(図59)<sup>62</sup>、乾隆帝がつくらせた三十点ものミニチュア器物を収める小箱「多宝格」(台北故宫博物院、図60)<sup>63</sup>などは、名跡を手のひらで愛玩するのみならず、模範的な古典を一堂に会する縮図としての意味も持っている。縮本蘭亭という分野自体は、こうした美術品の袖珍と集成という文脈に属している。

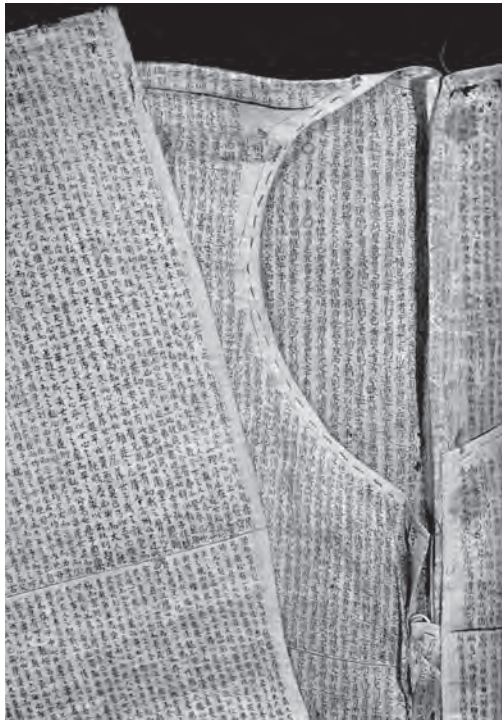


図 58 夾帶衣 (藤井齊成会有鄰館)

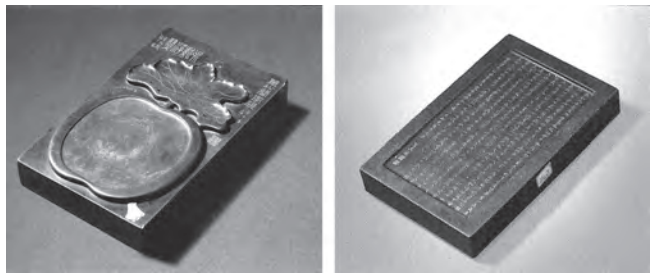


図 56 賀其蘭等刻「万松蘭亭硯」(1930年)



図 57 「蠅頭書筆」(清、黒川古文化研究所)

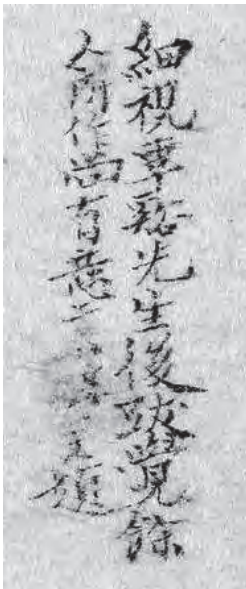


図 61 「蠅頭書冊・耆儒澄鑑」  
のうち戴熙跋  
(1835年、東京国立博物館)



図 60 「多宝格」(清、台北故宮博物院)



図 59 王子若刻「百漠硯碑」(清)

つまり、そもそも制作に多大な労力を費やし、解読も難しい小字作品には、それ相応の制作動機が必要なのである。では、翁方綱が黒川本の二つの跋文をかくも小さく記した動機は何だったのか。それはひとえに李宓「万松山房本」への対抗心ではなかったかと思われる。先に縮本蘭亭を比較し、翁方綱は筆勢よりも正確さを優先したと述べた。刻者の問題もあるにせよ、「翁縮本」にそうした傾向が認められることは確かである。しかし、黒川本の跋では、筆法をよく備える李宓「万松山房本」の横に書き加えるにあたり、より小さくより筆勢豊かに書こうとする意識が生じただろう。ちなみに「蠅頭書冊・耆儒澄鑑」でも、最小の字は冊の完成から四十年後に戴熙（一八〇一―六〇）が加えた字幅約一ミリの跋文であり（図61）、この種の作品では後に書く者ほどより小さい字に挑戦する傾向がある。ただ、中村伸夫氏が「ここまで小さくすると、一つ一つの文字に確たる書の技法を具備させることは困難であろう。この種の書芸の限界が露呈されたものともいえる」と評した戴熙の跋とは異なり、黒川本の翁方綱跋には大字と同様の完全な筆法が備わっているのである。

王澐が「万松山房本」に与えた「寛綽容与、能尽筆勢」という賛辭を黙殺した翁方綱は、文献や「翁縮本」拓本を見る限り、専ら字体の正確性に拘ったかのである。しかし、肉筆の黒川本の跋を観察すると、彼は書家として自らの小字こそがその賛辭に相応しいと自負していたことが窺い知れる。定評のある「玉枕本」でなくわざわざ「万松山房本」を底本としたのも、史上最小の蘭亭序を正確さと筆意の両面で乗り越えるだけの自信があったからであろう。

## おわりに

明末の李宓が作った「万松山房本」は、「翁縮本」の底本となった重要な作品だが、翁方綱に欠点を指摘され、ほぼその言及のみによって知られてきた。今回、当研究所で見出した李宓「万松山房縮本蘭亭序」翁方綱跋本によって、これまで翁方綱の口吻を信じて語られてきた評価を実物により検証することが可能となった。同刻石の拓本は北京故宫博物院にもあるが、そちらは無款であるゆえ、翁方綱が批判した「万松山房本」にあたるとの同定は行われてこなかった。一方、黒川本は李宓の款記等が残る整本であり、かつ跋文の内容からして翁方綱が「翁縮本」の底本とした拓本そのものと考えられる。また、翁方綱の跋も書法作品として非常にレベルが高く、彼の小字の実力を示す重要資料と言える。

本論前半では、まず黒川本の基礎情報を紹介してから、「万松山房本」の辿った歴史を文献によって復元した。その概要は年表にまとめた通りである。明末に漳州・万松嶺で活躍した書家、李宓は、郷里の石碑や王羲之のオマージュ作品を手掛け、当時は名声があったが、百年後には全く無名になっていた。清代に入り、王澐が「万松山房本」刻石を入手してから、この作品は一躍芸苑の中核で評価の俎上に載る。王澐は「万松山房本」の表現を高く評価したものの、李宓が何者かは知ることができなかった。内府所蔵の拓本（北京本）を見た張照も同様である。乾隆年間半ばには汪森が翻刻を制作した。その後、黄易は陳照圃なる人物からの伝聞によって、李宓が何者であるかを知ることとなる。

乾隆四十七年十月二十日、翁方綱は施学濂が持ち込んだ「万松山房本」（＝黒川本）を見て、その誤りを指摘し、修正しつつ自ら「翁縮本」を制作した。その日の翁方綱の活動については『復初齋文集』手稿本に載



る三篇の文章に詳しい。ここで翁方綱は王澐の評をくり返し引用し批判しているが、その引用の仕方から、王澐と翁方綱の関心が表現面と正確性に分岐していることがわかる。「翁縮本」はその後、翁方綱の関与しないところで二種刻石となり、拓本が現存している。なお、黒川本と北京本以外にも関連する拓本は現存していることが推測され、今後の資料紹介が期待される。特に汪論の翻刻本については、残念ながら現時点では実物の情報を確認できなかった。

本論後半では、実物の側に視点を移し、まず翁方綱『復初齋文集』に載る「審正万松山房縮臨本」の具体的指摘を黒川本や「翁縮本」、その他蘭亭序主要諸本と比較しつつ確認した。概ね翁方綱の指摘は正しく、「翁縮本」では修正されているが、それらの限界も見て取れる。一方、「万松山房本」の刻は大変精細で、筆意の変化、動的な字形を汲み取っている点ではむしろ「翁縮本」に勝るともいえる。明人の蘭亭序臨本を広く見渡すと、「万松山房本」だけが特に正確といえることはなく、彼らは翁方綱が指摘したような細かな字体の一致はそもそも求めていない。翁方綱はこうした明人の態度に批判的であり、「翁縮本」にも定武刻石の再現を狙った変更点が多く見いだされた。清朝帖学派は明人の傾向を無批判に受け継いだように紹介されることも多いが、本論で見たとように、万曆から乾隆までの二百年間に書学の精密さは大きく向上しており、翁方綱の書学は当時としては前人未到の域に入っている。彼は帖学・碑学の過渡期に位置づけられることもあるが、<sup>65</sup>のちの碑学派が翁方綱らへ向けた批判自体も、翁方綱が明人へ向けていた視線の延長線上にあると言える。

また、黒川本第二跋は他書に見られない翁方綱の小字論で、『負喧野録』をはじめ多くの典拠を引きながら小字書の歴史と心得を説いてい

る。この第二跋は書法作品としてもまさに内容が示す通りの小字の理想を体現し、無理のない結体と美しい筆法を備えている。書家というより学者・理論家として著名な翁方綱だが、彼の書は自らの理論をよく実践しており、中田勇次郎が「学者の書」と呼んだ清人の書を象徴する典型例とも言える。<sup>66</sup>多大な労力を要する小字作品にはそれなりの制作動機が必要だが、黒川本跋の場合、それは李宓「万松山房本」への対抗心であったろう。本論では従来評価されてこなかった李宓の視点を強調したが、跋文も含めると黒川本は李宓と翁方綱の評価をともに高める資料であった。

最後に筆者がかつて体験した小字をめぐるエピソードを紹介して稿を閉じたい。二〇一八年二月、紹興にある蘭亭の古蹟を旅したとき、その付近にある屋台で土産物の文鎮(図62)を購入した。その文鎮屋では店主自ら商品に小さく蘭亭序の全文を刻みつけていた。字幅は約二ミリで、なんと手本を参照することなく、誦んずるように同じ文句を刻み続けていたが、蘭亭序の原跡を彷彿させる字形・筆法が駆使され、大変見応えのある品であった。「万松山房本」も本来は何本のコピーでもなく、このような愛玩品だったのかもしれない。現代の職人の作にもかつて文人たちが追求した蘭亭の筆法が備わっているとすれば、李宓の刻石がこれほど精細な出来であるのも怪しむに足りない。それを、百年後の中央芸苑にて王澐が見出し、翁方綱が反応し、小字書法のさらなる可能性を追求していったのである。

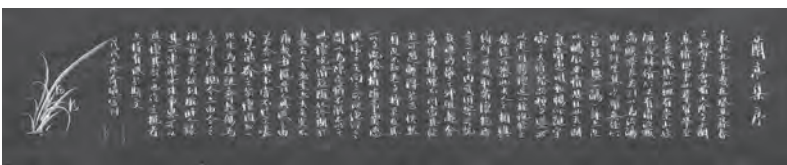


図62 兪備富「縮臨蘭亭紙鎮」(2018年)

註

- (1) 『微の美術 日本・中国の小ささと緻密さの造形』（和泉市久保惣記念美術館、二〇一四年）。
- (2) 蘭亭序に関する研究は枚挙にいとまがないが、重要なものとして、徐邦達「王羲之《蘭亭序》臨本前後七種合考」（『書譜』四四、四九期、一九八二年）、啓功「《蘭亭帖》考」（『啓功叢稿・論文卷』中華書局、一九九九年）、啓功「唐人摹《蘭亭帖》二種」（『啓功書法論叢』北京文物出版社、二〇〇四年）、王連起「關於《蘭亭序》的若干問題」（『書法叢刊』二〇一二年五期）、朱閔田「《蘭亭序》在唐代的影響」（華人徳・白謙慎主編『蘭亭論集』蘇州大学出版社、二〇〇〇年）を挙げておく。また、宋代以降の蘭亭序の流伝や鑑賞に関するものに水賚佑「宋代《蘭亭序》之研究」（華人徳・白謙慎主編『蘭亭論集』）、祁小春「蘭亭序問題 從文獻學的角度重新考察」（『邁世之風 有関王羲之資料与人物的総合研究』（石頭出版社、二〇〇七年）、清代の蘭亭序に対する認識をまとめたものに劉恒「清代書家与《蘭亭序》」（華人徳・白謙慎主編『蘭亭論集』）、近年の日本での論考として成田健太郎「唐宋の蘭亭伝説について」（『埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書12 書くこと／書かれたもの 表現行為と表現』、埼玉大学教養学部、二〇二一年）がある。
- (3) 縮本蘭亭の歴史については陳紅梅「玉枕蘭亭」的刊刻流伝及其影響」（『書法賞評』二〇一二年三期）、趙明「神融方寸《蘭亭序》縮字拓本与縮臨問題」（『書法研究』二〇一三年四期）。
- (4) 張英傑「二百蘭亭齋」所藏《蘭亭序》版本考察 兼談其対《蘭亭序》的研究与伝播」（『中国国家博物館館刊』二〇二二年六期）。ちなみに、当研究所にも「二百蘭亭齋」旧蔵の王澐「縮臨蘭亭序」があり、顧昉・徐玫「蘭亭曲水図」が付属している。
- (5) 『書道全集 第二十二卷』（平凡社、一九三一年）。
- (6) 画像と名称をあわせて紹介する記事は、管見の限り『人民中国』一九八四年九期「書道鑑賞」欄に載る張鉄英「明・李宓の「万松山房蘭亭帖」のみである。ここに掲載された拓本は、その特徴から見ても黒川本でも北京本でもないと思われる。
- (7) 北京本は、北京故宮博物院では二〇一〇年「珍秘翰墨 清宮藏善本碑帖特展」や二〇一一年「王羲之蘭亭特展及蘭亭珍拓展」に出陳されている。王禕「珍秘翰墨 清宮藏善本碑帖特展側記」（『收藏家』二〇一一年三期）、故宮博物院編『蘭亭典故』（紫禁城出版社、二〇一一年）を参照。
- (8) 「此本為明人李宓所造。」（明拓縮本蘭亭序）張照跋、北京故宮博物院。
- (9) 趙明二〇二三、前掲註3。
- (10) 「《蘭亭序》的縮摹拓本繁多、其中也不免出現一些拙劣的翻刻本、翁方綱在乾隆壬寅（1782）年跋施耦堂所藏《万松山房縮本蘭亭》就曾提到此類刻本。」（趙明二〇二三、前掲註3）。
- (11) 「明拓《縮本蘭亭》正文与前頁所鈐“宝笈三編”“乾隆御覽之宝”印璽大小一樣（縦約5厘米、図3）、对于這種能在方寸之間展現《蘭亭序》且毫厘不差的絕技、張照在乾隆癸亥（1743）十一月跋曰：“此本為明人李宓所造、蓋縮、定武、為蠅頭、無毫厘不肖、似技埒棘猴哉。”（趙明二〇二三、前掲註3）。
- (12) 「李宓名款前有蘭亭記三字作一行、後有李宓二字連珠小印。」（翁方

綱『復初齋文集』手稿本「自跋審正万松山房縮本蘭亭」、台北中央圖書館。影印本は『清代稿本百種彙刊 復初齋文集』文海出版社、一九七四年、該當箇所は第五冊一三〇八〜一三〇九頁。

- (13) 蠅頭書に関する近年の論考に中村伸夫「希觀資料紹介 蠅頭書冊」著『儒澄鑑』に寄せて(その1、3)、『書法漢学研究』二五〜二七号、二〇一九〜二〇二〇年)がある。中村氏は文中にて、「蠅頭の書については従来ほとんど研究されていない領域であることから、時間をかけて新たに考究すべき書法史上の一課題ではないかと考える」と述べている。

- (14) 「子貢曰、有美玉於斯。韞匱藏諸。求善賈而沽諸。」(『論語』子罕)。箱に収めておくこと。子貢は孔子が世に出て仕えないことをたとえて言った。

- (15) 李竹深「明代漳州著名書法家李必事迹稽考」(『漳州職業技術學院報』二〇〇一年三期)。

- (16) 「李必、字義民、龍溪人。工諸體書、琳宮碑額、揮洒最多。華亭董文敏嘗具書幣請其書、自嘆不及也。晚以黃庭内外經一經一緯、右軍書外景而不書内景、遂統三千字補之。結体工妙、織入無倫。論者以為如天女散花、繁采麗密、自然縹渺也。王弼林于燕得片石、為玉枕蘭亭、歎其精絕、但不知為漳人耳。所書黃庭一石、數年前為郡守張西圃鎮購去、允為近代絕手。當時有陳日炳者、雅相伯仲。」(光緒四十年『漳州府志』卷四十八「紀遺上」)。

- (17) 「李必、字義民、閩之龍溪人、家於万関下。」(黃易『秋盦遺稿』不分卷「跋汪雪礪摹褉帖縮本」、宣統二年羅振玉序刊本)。

- (18) 「万松関在岐山之間、為京省通道、初陳克聰植松以憩行人、歲久凋枯、惟巨石林立。万曆間、督学沈傲价名曰堆雲嶺。崇禎二年、知府施邦

曜築関、額曰天寶維垣、其堞高可見海。大学士林鈺為之記。」(光緒五年『龍溪県志』卷十一「古蹟」)。

- (19) 「万松嶺、在岐山鶴鳴二山間、旧名馬岐路。通泉福。上有亭。正統間、郡人陳克聰植松夾道、連陰十里、行者便之、因今名。」(弘治三年『八閩通志』卷八「地理」)。

- (20) 「李必之家在東坂後、未仕時、為人書真柑籠字。因是、宮廷多知漳州有個李必之字甚佳。適林鈺告老回漳、為嘉靖廟撰碑文、長幾千字、遥寄京畿、請董文敏書石、文敏不敢書、謂漳州有李必在、自嘆不及也。乃就李必書之、必名遂大噪。」(翁國樑『漳州史蹟』福建協和大学福建文化研究会、一九三五年)。

- (21) 「孟子曰、道在邇、而求諸遠。」(『孟子』離婁上)が踏まえられている。道はごく手近なところにあるのに、わざわざ遠くに求めてしまうことを言う。

- (22) 「自昭陵得辯才蘭亭、命起居郎褚遂良等撫、賜諸王大臣、於是世間伝本遂衆。然筆法雖異、而尺幅不殊。至宋賈秋壑始以定武五字損本縮成小字、今所伝玉枕蘭亭是也。余以癸巳冬得李必所摹小石於燕市、用褚本縮成徑寸、刻於青田石四面、字細若蠅頭、而寬綽容与、能尽筆勢、以較原本、不失毫髮。此又玉枕後一奇玩也。李必為神廟時人、書学精能如此、而名不顯於時、爵里亦無從考見、深可惋惜。然幸留此石、使天下後世尚知有李必姓名、亦不可謂之不幸矣。余得此石絕珍愛之、念不忍終没、乃精搨數十本、流布人間、李必有知、当引王生為知己。或遇有知李必者、使僕得考其生平、作為小伝、与此石俱不朽、是亦千古一快事也。」(王澍『虚舟題跋』卷九)。「虚舟題跋」は『藝術文獻集成 虚舟題跋 竹雲題跋』(浙江人民美術出版社、二〇一九年)の校訂によった。以下、漢文の引用に際しては、詳細な内容を検討

する場合には訓読を、テキストの校訂を主目的とする場合には原文を本文に掲載した。

(23) 「字画雖小、而寬綽有餘」(『宣和書譜』卷五「小字三教經」)。

(24) 「唯天下至誠、為能尽其性。能尽其性、則能尽人之性。能尽人之性、則能尽物之性。能尽物之性、則可以贊天地之化育。」(『中庸』)。

(25) 「蘭亭石刻有一百一十七種。宋理宗内府裝為十冊、今散落人間。其元明所刻、又不知凡幾也。定武向為甲觀、元時已艱致誦、趙孟頫跋可見宋趙孟堅落水本、至今猶存海内第一也。此本為明人李宓所造。蓋縮定武為蠅頭、無豪釐不肖似、技埒棘猴哉。彼一百一十七種内、已有柳公權大字、秦觀小字。然則放大收小、唐宋有之、不始于宓也。若孫過庭、吳詵為草書、則別出一枝、不向如來行處行矣。乾隆癸亥十一月望。臣張照敬跋。」(『明拓縮本蘭亭序』張照跋、北京故宮博物院)。

(26) 「賈秋壑玉枕定武已奇、李宓所縮尤更小更奇。雪礪兄兩摹之、不差毫髮、誰云今人不及古耶。王虛舟吏部初得李宓刻石於燕市、不知其人。吾友陳照圃自閩來云、李宓、字義民、閩之龍溪人、家於万関下。明万曆間、以書名、梵宇琳宮、多其遺跡、董文敏慕其書、每具幣求之、事具邑乘。陳君曾見小楷黃庭内景經、手刻於龍池片石者、極精妙、為海豐張外郎穆庵購得之藏於家、其說可信。王吏部云、余得李宓刻石、絕珍愛之、不忍終没、精拓數十本、流布人間。李宓有知、當引王生為知己。今雪礪兄妙手精心、広名蹟之伝、亦古人知己。惟余生也晚、未見吏部不能以陳君之言相告一為称快然、有雪礪兄知之、亦良慰矣。玉枕是經廖瑩中手縮、廖与李皆閩人、異苔同岑、後先媲美、何閩人多藝与。」(黄易『秋盦遺稿』不分卷「跋汪雪礪摹禊帖縮本」、宣統二年羅振玉序刊本)。

(27) 「施学濂、字耦堂、錢塘人。乾隆三十一年進士。官至兵科給事中、精

鑑賞、辨周秦物糸毫不失。広坐中踔厲風発、常屈其右。」(民国十一年『杭州府志』卷一四六)。

(28) この手稿本には書画への跋など最終的に文集に再録されなかったものも含めて数多くの原稿が確認できる。現在は台北の中央図書館に蔵され、文海出版社より『清代稿本百種彙刊 復初齋文集』として全二十八冊の影印本が出ている。また、沈津『翁方綱題跋手札集録』においてある程度の翻刻がなされ、話題ごとに整理されている。ここでの該当箇所は『清代稿本百種彙刊 復初齋文集』第五冊一三〇七―一三一二頁。

(29) 「万松山房縮臨蘭亭、後題万曆丙子年秋九月重陽前李宓臨并勒於万松山房。此本行次位置大誤者凡二処。第十行末錯移下一字、第八行末錯移上一字也。至其筆画之失、則稽字下半誤移正中、觴字誤易為易(二処)、叙字多一ノ、聘字馬下三点誤為一画、躁字左祭下半全失、不同不字上画誤連、当字右直誤斷、己字誤已、快字誤快、不知不字上画誤連、老字上半折処誤斷、所之之字末筆全失、既字左半全失、倦字誤イ、遷字中訛加横、尽字中間誤多一横、死字左誤已(二処)、亦字誤作三点、昔人昔字下日誤作草書、之由之字誤作草書、後二之字亦然、嘗字末筆誤出太長、未嘗不字全失、不能喻之不字誤連、喻字失一横、虚字下半全失、視昔視字不誤為示、故列故字末筆、列字末筆皆失、致字、攬字、将字皆全失。以上就其顯然失誤者、已有三十五処之多、至其細微曲折不能肖者、則字字有之。此内止死生亦大矣亦字、惟褚本或有作三点者、其餘則歐褚并無岐出。此本之失、不得以褚本諉也。李宓、字義民、福建龍溪人。其石曾為王翦林得於燕市、後又為揚州人汪盦中也重摹刻石、今皆藏揚州黄氏家。翦林跋云、用褚本縮成逕寸、刻於青田石、四面、細若蠅頭、而寬綽容与、

能尽筆勢、以較原本、不失毫髮。此又玉枕後一奇玩也。此跋頗以不知其人爵里為惜、今予既得其爵里、而又見其拓本、何幸如之。然其中顯然之失、至於行次之誤移、偏旁之失錯、而翁林以為較原本不失毫髮、則翁林所謂以宋牋精摹趙子固落水本不失毫髮者、亦概可知矣。信乎精鑑之難也。予從耦堂侍御假觀、因用定武落水本筆意審正重摹、并識其概於後。然此特因李氏原刻、行次參互、勉為推算改正、是以雖較李氏本既加審正、而仍不敢自信為毫髮無差也。它日儻得遇良工、為我勒於寸石、仍當細意重摹一過耳。」(翁方綱『復初齋文集』石印本卷二十七「審正方松山房縮臨本」)、『復初齋文集』定稿の版本は沈雲龍編『近代中国史料叢刊』(文海出版社、一九六九年)所収影印本によった。

(30) 「方松山房縮臨蘭亭、後題丙午年秋九月重陽前、李宓臨並勒於方松山房。李宓、字義民、福建龍溪人。此石嘗為王虛舟得之燕市、後又為揚州汪恂中也所摸刻。今二石並藏揚州黃氏家。虛舟跋云、用楮本縮成逕寸、刻于青田石四面環轉、細若蠅頭、而寬綽容与、能尽筆勢、以較原本、不失毫髮、此又玉枕後一奇翫也。虛舟頗以不知其人爵里為恨。今予既得其里氏、而又得見其拓本、何幸如之。然其中頗有行次位置之移失、偏旁点画之舛訛、不知虛舟先生何以云毫髮不失。甚矣精鑑之難也。予從耦堂侍御借觀、因用定武落水本筆意審正重摹、凡改定四十餘处、而後成之。然此特因李氏原刻差誤太甚、至于臨写之際、逐行逐字為之推算改正。是雖較李氏本為已經釐正、而仍不敢自信為毫髮之逼真也。它日儻得良工為我勒于寸石、仍當重摹一過、以求精至云爾。乾隆四十七年歲在壬寅、冬十月二十有八日、北平学人翁方綱識于蘭盟書屋。」(「翁方綱縮本蘭亭序」自跋、東京国立博物館)。

(31) 高橋佑太「王澐書法理論の翁方綱への影響について 二者の比較を通して」(『書芸術研究』二号、二〇〇九年)、魏琪「論清代碑學的萌興 翁方綱、王澐書法觀的分合為中心」(『中国書法』三二八号、二〇一八年)。

(32) 中村伸夫二〇一九〜二〇二〇、前掲註13。

(33) 「李義民、以小字擅名。然蘭亭縮為蠅頭細書、本自難工、亦不專責之刻手也。夢華不遠千里、寄此屬題、為書其後。嘉慶三年、歲在戊午秋九月二日、北平翁方綱。小字不難於得形、而難於傳神。不難於緊密、而難於縱橫有法外之意、可語此者鮮矣。戊午九月二日。」(翁方綱『復初齋文集』手稿本「縮臨蘭亭二種・李宓方松山房」)、『清代稿本百種彙刊 復初齋文集』第十三冊三六五七頁。前者は類似の記述が翁方綱『蘇齋題跋』にも見られる。「李義民以小楷擅名、然蘭亭縮為細書、本自難工。此中欲拈古人妙处在神理栩栩欲活、非可以皮相也。」(『蘇齋題跋』卷下)。「蘇齋題跋」については西林昭一『翁方綱の書学 『蘇齋題跋』 訳註』(柳原出版、一九九六年)を参照。

(34) 北京故宮博物院の「翁縮本」については、尹一梅「翁方綱的金石審鑑与書法成就 以故宮藏兩件書迹研究為中心」(『書法研究』二〇二一年三期)を参照。

(35) 蘭亭序主要諸本の基礎情報は王連起「《蘭亭序》重要版本簡說」(故宮博物院編『蘭亭凶典』紫禁城出版社、二〇一一年)。

(36) 「死生亦大矣亦字是四点。」(『齊東野語』卷十二「白石禊帖偏傍考」)。

(37) 「列叙之列、其豎如鉄釘。」(『洞天清祿集』「古今石刻辯」)。

(38) 行立てに關する①②を除き、④⑬⑲⑳は各二つ、㉑㉒㉓は各三つと数える。手稿では傍注によって番号が付されている。

(39) 「蘭亭宗尚定武、玉枕本原從定武縮臨、猶不失真。蠅頭小字本創自李

宓、已非蘭亭真面、後之倣者不一、愈失之遠矣。覃溪年伯手書此冊、雖云更正李本、而實規模定武、凝神細視、無一筆不肖、具有右軍龍跳虎臥之勢、較李本何啻徒倍過之。若得好手勒石以傳、寧非虛舟所謂玉枕後一奇玩乎。」（『翁方綱縮本蘭亭序』宋葆淳跋、東京国立博物館）。

(40) 「近見方松山房楷書陶淵明飲酒詩二十首刻于片石、工細絕倫、欲手拓一紙而不能。蓋義民精于刻小字、而不善臨摸。」（『翁方綱縮本蘭亭序』宋葆淳跋、東京国立博物館）。

(41) 尾川明穂「歴代書跡に對する董其昌の鑑定・評価基準」（『書学書道史研究』二三号、二〇一三年）。

(42) 「蘭亭非不正、其縱石用筆處、無迹可尋。若形摹相似、転去転遠。」（董其昌『容台別集』卷二）。

(43) 朱友舟「論翁方綱関于米芾、董其昌書法的題跋」（『邵陽学院学报（社会科学版）』第六卷第五期、二〇〇七年）。

(44) 「此臨本雖題定武、然止取大意而已。後自題、嘉靖戊午二月、是年秋九月衡山臨譚崇久所藏五字不損本。以小楷自識於後。此所臨未知是何本也。」（『清代稿本百種彙刊 復初齋文集』第十三册三六八頁）。

(45) 「文敏背臨蘭亭、乃純以己意行之、尚嫌褚臨本過於刻画邪。實則褚臨本即覺己意多而古法少矣。吾嘗宝文敏言詩書画家成名後不復摹仿、或多杜撰、此吾輩午夜鐘聲也。」（『清代稿本百種彙刊 復初齋文集』第十三册一〇九七頁）。

(46) 「今只存此臨本、然崇字山下無小点、帶字上四直齊平、死生亦大矣亦字三点、皆不合。而却闕前会字。」（『清代稿本百種彙刊 復初齋文集』第十三册三六八頁）。

(47) 中村仲夫二〇一九（二〇二〇）、前掲註13。

(48) 「右予旧跋臨方松山房蘭亭石本。蓋其時初見趙子固落水本、知右軍此書全以篆法為之、故能勘破後來臨本之積習耳。玉枕蘭亭、亦以歐褚二家分派。歐臨以定武落水本為圭臬、褚臨則蘇太簡家藏本可以作類并本之息壤。而世所行神龍本、即褚法之最見精神者。因偶見四明范氏天一閣石本、是豐南禺所勒石、即文休承跋中所云、刻於烏鎮者。若能以此種褚法縮為蠅頭書、壽之貞珉、豈非快事歟。乙卯八月廿五日、方綱又書。」（『蠅頭書冊·耆儒澄鑑』翁方綱第二段、東京国立博物館）。

(49) 「嘉慶丙子閏夏、檢旧藏翁學士臨縮本蘭亭、愛其精美、倩謝青岩壽諸石、以広其伝。南海葉夢龍誌於友石齋。」（『翁方綱縮本蘭亭序』葉夢龍跋、北京故宫博物院）。

(50) 「余以落水本校之、其失誠如翁氏所言。然以翁氏之訂正兩刻本校之、雖点画不失、反不如此本之得神。王澐所云「寬綽容与、能尽筆勢」之言不虛、故知李宓之技遠勝于謝青岩汪蔚輩也。」（容庚「蘭亭五記」、『文学年報』一九四〇年六期）。

(51) 陳熙「負暄野録」は四庫全書本によつた。中田勇次郎「文房清玩一」『中田勇次郎著作集 第八卷』（二玄社、一九八六年）に現代日本語訳がある。

(52) 「東漢師宜官善書、大則徑丈一字、細則能方寸千言書。是經者亦以尺紙作七万字、殆得宜官法也。晋衛巨山論書云、其大徑尋、細不容髮、迫而察之、心乱目眩、奇姿譎詭、不可勝原研桑所不能計、宰賜所不能言。僕于此經亦云。政和五年二月甲寅雲林子黄長睿父書。」（黄伯思『東觀餘論』卷下）。

(53) 「凡世之所貴、必貴其難。真書難於飄揚、草書難於嚴重。大字難於結密而無間、小字難於寬綽而有餘。今君所藏、抑又可珍、卷之盈握、沙界已周、讀未終篇、目力可廢。乃知蝸牛之角可以戰蛮触、棘

荆之端可以刻沐猴。嗟嘆之餘、聊題其末。」(『文章辨体彙選』卷三百六十八「跋王晋卿所藏蓮華經」)。

(54) 「有国於蝸之左角者曰触氏、有国於蝸之右角者曰蛮氏。時相与争地而戰。」(『莊子』則陽)。

(55) 「宋人有請為燕王以棘刺之端為母猴者。曰、必三月齋、然後能觀之。燕王因以三乘養之。右御冶工言王曰：(中略)：王因囚問之。果妄。乃殺之。冶人謂王曰、計無度量、言談之士多棘刺之說也。一日、燕王好微巧。衛人曰、臣能以棘刺之端為母猴。燕王說之、養之以五乘之奉。：(中略)：謂衛人曰、客為棘刺之母猴、何以。曰、以削。王曰、吾欲觀見之。客曰、臣請之舍取之。因逃。」(『韓非子』外儲說左上)。

(56) 「無豪釐不肖似、技埒棘猴哉。」(『明拓縮本蘭亭序』張照跋、北京故宫博物院)。

(57) 「凡大字要如小字、小字要如大字。褚遂良小字如大字、其後經生祖述、間有造妙者。大字如小字、未之見也。」(米芾『海岳名言』)。

(58) 「相伝翁覃溪學士、垂老康強、目力尤勝。六七十時、猶能於燈下作細書、閱蠅頭字不佞謾鍵。每歲元旦、必用西瓜子仁書四楷字、五十後日万寿無疆、六十後日天子万年、至七十後猶能写天下太平云。可謂異稟。按翁氏家事略記載。英和按云、先生每於一粒胡麻上作一片冰心在玉壺七字、則尤為神技矣。」(陳康祺『郎潛紀聞』卷九)。

(59) 「臨李必万松蘭亭、參以定武落水本筆意、三日而竟。庚午元旦、賀其蘭。」(『万松蘭亭硯』銘、『文房名品展』石川県立美術館、二〇二一年に掲載)。

(60) ハリー・オニール(前川健一訳)「日本の宝塔曼荼羅の原形とそれを生み出した背景についての研究 中国・朝鮮における起源と写経

の文化」(『東洋學術研究』五一号、二〇一二年)。

(61) 王静靈「建立典範王時敏与《小中現大冊》」(『美術史研究集刊』二四号、二〇〇八年)。

(62) 杉村邦彦「百漢硯碑追蹤」(『書論』十四号、一九七九年)。

(63) 川村佳男「多宝格」(『台北国立故宫博物院 神品至宝』東京国立博物館・九州国立博物館、二〇一四年)。

(64) 中村伸夫二〇一九〜二〇二〇、前掲註13。

(65) 清朝書道史における乾嘉期の位置づけについては、大野修作「清朝書道史概説」(『墨スペシャル』13 中国清朝の書』芸術新聞社、一九九二年)など。また、碑学派の理論を提唱した阮元と翁方綱の連続・非連続的關係については、朱友舟「翁方綱的書学思想研究」(『書法研究』一二九期、二〇〇六年)、菅野智明「翁方綱の北碑觀 兼ねて阮元説との關係に及ぶ」(『中国近現代文化研究』十号、二〇〇九年)を参照。

(66) 中田勇次郎「書の時代性」(『中田勇次郎著作集 第一卷』二玄社、一九八四年)。

## 図版出典一覧

付記

本稿を成すにあたり、東京国立博物館の六人部克典様から作品調査にご高配を賜りました。また、本論文の執筆にあたり、東京大学大学院の陳雪濤様、京都市立芸術大学の竹浪遠先生から貴重なご指導とご助言を賜りました。ここに記して深く謝意を表します。

- 口絵 1、4、図 62 筆者撮影  
口絵 5、11、図 36、38、50、55、57 深井純氏撮影
- 図 1 孫宝文・申新仁編『歴代蘭亭序墨宝 7 玉枕本蘭亭序』吉林文史出版社、二〇〇九年
- 図 2、5、40、49、61 Colbase 国立博物館所蔵品統合検索システム  
(<https://colbase.nich.go.jp/?locale=ja>)
- 図 3、6、8、39 故宮博物院編『蘭亭図典』紫禁城出版社、二〇一一年
- 図 4 『清代稿本百種彙刊 復初齋文集』文海出版社、一九七四年
- 図 7、60 故宮博物院蔵品探索  
(<https://www.dpm.org.cn/explore/collections.html>)
- 図 9 『中国法書選 15 蘭亭序〈五種〉 東晋王羲之』二玄社、一九八八年
- 図 10 陳鈍之主編『歴代名家碑帖經典 蘭亭集序 十四品』中国書店、二〇一七年
- 図 11、35 右記各出典等をもとに筆者作成
- 図 56 『文房名品展』石川県立美術館、二〇二一年
- 図 58 『有鄰館名品展図冊』日本書芸院、一九九二年
- 図 59 『書論』十四号、書論研究会、一九七九年